

---

# 魔法少女リリカルなのは～FlameS～

コーヤ豆腐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～FlameS～

### 【Zコード】

Z6998P

### 【作者名】

コーヤ豆腐

### 【あらすじ】

すずかをなのは、フェイト、はやてのような魔法の力で守りたいと密かに思うアリサ。しかし、突如以前のような結界の中に迷い込んでしまったアリサ。そこで目にしたのはなのは達に傷つけられたすずかの姿であった。そしてアリサは決意とともに力を手にする・。

## じつあんせす設定（前書き）

小説を書かせるためにあたって、情報をまとめてみました。あくまで仮定なので変更する場合もあります。

## とりあえず設定

今のところの詳細設定

### キャラ設定

アリサ・バニングス  
魔力量クラス：？？  
魔導師ランク：非保有  
変換資質：？  
使用デバイス：？？？？

### オリキャラ設定

イルミナ・アレイズ  
性別：男  
年齢：16歳  
魔導師ランク：S-  
魔力量クラス：AA  
変換資質：氷  
元時空管理局執務官  
使用デバイス：ヴィゾーヴニル  
詳細：3年前のとある事故で両親と妹を失っている。

### アラストール

性別：-  
年齢：-  
魔導師ランク：-  
魔力量クラス：-

変換資質：---

使用デバイス：---

詳細：アリサの持つデバイスに宿る意思。  
種も仕掛けも無いそのまんま

## 第一話「事件の始まり」（前書き）

初めての投稿なので、少し変なところがあったりキャラの口調がかしかつたりするかもしれないで温かい田で見守るように読んでください。変なところがあれば指摘してもらえると幸いです。

## 第1話「事件の始まり」

闇の書事件の2年前・・・新暦63年

少年は焦土と化した街の一角に佇んでいた。涙を流しながら・・・

少年「どうしてこうなったんだよー！父さんー母さんー頼むから僕のところに帰つてきてくれよ！」

少年は叫ぶが誰にも聞こえはしない。自分が時空管理局の執務官であることも忘れ、地面に膝をついて泣きじゃくつた。そして少年は憎しみを含んだ目で復習を誓つた。自分の家族を殺した管理局への復習を・・・

闇の書事件から1年後・・・新暦66年

私立聖祥大付属小学校の4年B組の教室の中ではいつもどうりの平和な光景が広がっている。その中で一人、戦っている人間がいた。アリサである。彼女が今、戦っているのは睡魔だ。

## 『アリサ side』

アリサ（こじても既にねえ。じつにいつも管理局で仕事してるはずのなのはや、フロイト、はやはあんなにピンピンしてんのかしら？まさか魔法とか卑怯な手を使つてんぢやないでしょうねえ。）

と、3人を見守りながら、横の席のすずかが小声で話しかけてきた。

すずか「すい怖い顔つきしてのはちやん達を睨んでいるナビ、何があつたの？」

それに私は小声で応答する。

アリサ「なんもないわよつ。」

すずか「何も無かつたら普通そんな顔しないと思つただけど・・・」

アリサ「うへ、うるさいねーーなんもないつたらなんもなーのよつー。」

そこで困った表情をした先生から「ナレ、うるさいぞ。しゃべるのなら周りに迷惑がかからないようにしてくれ。」と、注意を受ける。すると、教室中にクスクスと笑い声が広まつた。少し声が大きかつたかなあと、反省しているとふと、1人の視線に気がついた。はやてだつた。

はやはアイコンタクトでメッセージを送つてきた。

はやて（相変わらず、すずかとラブラブやなあ。はよ結婚してまえ）

アリサ（「う、うるせこつるをこつるた。べつ、べつにラブリーブ  
なんかじや・・・）

そうアイコンタクトを送り返すも、はやてはにたにたと笑いながら  
はやて（もう言いつつも耳まで赤いで。ホントは好きなんやろ？田  
まで泳いでるしバレバレや。）

と言つて、はやては逃げるように体を黒板のほうへ向き直した。

アリサ（殺つてやる、もつ我慢できない。放課後、今にみてなさい  
よつー）

そう思い、アリサも授業に集中することにした。集中していたの  
で意外と早く時が過ぎて、気付けば放課後だった。アリサはすぐに  
はやて達のところに向かったが、はやて達は、なにか追い詰められ  
たような顔をして話し合っていた。

はやて「今、海鳴市・・・魔導師・・・潜ん・・・  
クラスAAや。次元・・・者・・・確率が高い。」

小声でよく聞き取れなかつたが、確かにこう言った。今聞き取れ  
た内容でだいたい何を言つたかあたしにはわかつた。たぶんこうだ  
『今、海鳴市に魔導師が潜んでる。魔力量クラスはAAや。次元犯  
罪者の確率が高い。』こんな感じか。まだ話し合いは続いているよ  
うだったが、何も知らないふりをしてその輪のなかに入り込んだ。

アリサ「三人で何話し合つてんのよつ。あたしも混ぜなさいよ。」

なのは「ふえ？ア・・アリサちゃん？」

アリサ「みんなで何暗い顔してんのよつ。学校も終わつたし遊ぶ？」

フヒイト「今ほせ・・・・・ひょつと・・・あの・・・。」

はやて「すまんなあ。つこわつを管理局に呼び出し食ひつたんや。こつちも遊びたいけどなんかごめんな?」

アリサ「・・・なら仕方ないわね。じゃつ、また明日。」

三人「(うそ)ほな、また明日へな。(ね)。」

『なのは』

アリサ「・・・なら仕方ないわね。じゃつ、また明日。」

なのは「うそ、また明日ね。」

アリサちゃんは踵を返してすすかちゃんの所へ行きそのまま帰つていった。それでほやはては

はやて「ほな、私も帰ろか。帰つてから搜索の準備せ、んで3時半に臨海公園に集まろ。」

なのは「うそ」

フヒイト「わかつた

せうして学校を出た私は、フロイトちゃんと一緒にそれぞれの家に帰った。

家の門には、恭也お兄ちゃんがいたので友達と遊んでくると、適当な理由をつけてフローレット状態のコーノ君と家を出た。門の前ではフロイトが待っていた。

なのは「フロイトちゃん、お待たせ。」

フロイト「ううん、そんなに待ってないよ。それじゃ行け。」

なのは「うそ」

臨海公園に着くとはせりかさんとガオカルケンリッター達がすでに待っていた。

はやて「おー、やつと来たか。なんや? 今まで繋いでラブリーフやな。はよ結婚してまえ。」

フロイト「まだ早いって……。」

なのは「やつやつ……ひでフロイトちゃん結婚するいじわる定めは無いのー?」

せやで「と、冗談はいじわるこいつは本題じゃこりゃ。」

「

と、せやでやんの顔つきが変わった。隣でフロイトちゃんが「冗談だったのー?」と言しながら驚愕で田を見開いていたが、はやてちゃんはそれを無視して

はやて「せりや、シャマルに探査魔法かけてもらつたんやけど。結果が著しくなくてなあ。」

と、はやてちゃんがポケットから徐に海鳴市の地図をとりだし、深刻な顔つきで話し始めた。

はやて「さつきの探査魔法で反応があったのはいいら辺一帯や。」

と、言いつゝはやてちゃんが地図に赤のペンで円を書き記した。半径で言うとだいたい200mくらいだ。地図は5万分の1の縮尺だから実際の距離で半径10kmくらいだと分かった。

だけど私には、はやてちゃんが何故こんなに深刻な表情をしているのかが分からなかつた。気になつたので直接聞いてみた。

なのは「はやてちゃん、なんでそんなに深刻な顔をしているの?」

はやて「この円の中をよくみてみ。」

私とフロイトちゃんが地図を覗き込むと、フロイトちゃんが何かに気付いたように「はっ!」と声をあげた。

はのは「フロイトちゃんにか分かつたの?」

と、私が聞くとフロイトも深刻な顔をして衝撃の一言を全員に告げた。

「フロイト、この円の中心は・・・アリサの家があるといふ。」

「この言葉に、この場の空気が凍りついた。」

## 第1話「事件の始まり」（後書き）

次回でアリサを覚醒させたいけど・・・次の次かなあ。

## 第2話「いつのロストロコギア」（前書き）

一応、闇の書事件からもう一年くらいたっているので季節は冬です。

はやては自分で歩けます。

設定を大幅に変更しました。

## 第2話「いつのロストロギア」

『なのは s.h.d.e』

なのは「でもでも、ただの偶然なんじゃないのかな？」

フュイト「ん、んうだよ。ただの偶然だよ。」

私とフュイトちゅうさんの会話を遮るかのようにはりちゃんが口を開いた。

はやて「残念ながら、偶然とは考えられないんや。さつき、クロノから連絡があつたんや。管理局で保管されていたロストロギアが2つ、何者かが盗んでいったらしいで。一つともそれぞれ危険度は少ないものの、ある『一定の条件』が揃つと世界の一つや一つは余裕で壊せるしちゃう話や。」

フュイト「その条件って？」

クロノ「遅れてもない。そこからの説明は僕がさせてもいい。」

クロノ君がタイミングを見計らつたかのように、アースラーから転移してきた。はやてちゃんは「いいとこ持つて行きよつて、私にしゃべらせんかい。」とクロノ君につづかろうとしているが、シヤマルさんが「まあまあ」と言つてはやてちゃんをなだめている。

クロノ「盗まれたロストロギア、名前はそれぞれ『贊殿遮那』、『天壤の劫火』だ。『贊殿遮那』は刀の形をしている。そして『天壤の劫火』は、簡単に言えばネックレスだ。特徴は黒っぽい宝石の中に火の粉のような光がちらついている。この二つのロストロギアで一つのデバイスとして機能するらしい。」

なのは「それが『一定の条件』なの?」

クロノ「いや、違うな。それなら今すぐにでも使って目的を果たしているはずだ。」

ユーノ「た・・・確かに・・・。」

クロノ「この二つのロストロギアを揃えるだけは誰にもできる。といつても、盗まれる前まで管理局に保管されていたから揃える事もできなかつたが。」

ヴィータ「なあ、それで、『一定の条件』ってのは何なんだ? もつたいぶらざ早くしゃべってくれよ。」

クロノ「あ・・・ああ。『一定の条件』それはまずさつき言った通り、『贊殿遮那』と『天壤の劫火』を揃える事だ。」

クロノ君が一呼吸おいて、またしゃべり始めた。

クロノ「『一定の条件』そのうち最大の難関。それは『適合者』だ。何にせよ、すでに滅んだ世界の遺産だ。別の次元世界に『適合者』

が一人もいなくてもおかしくは無い。だが、一人だけいたんだ。しかもこの世界に。」

フェイトちゃんが気付いたような感じで顔を上げたが、その考えを振り払おうと首を横に振つていた。私も多分、フェイトちゃんと同じ考えが浮かんでいる。

なのは「その『適合者』ってもしかしてアリサちゃん？」

私はその考えが間違つていると信じてクロノ君に聞いてみた。しかし、返ってきた答えはそのわずかな希望も打ち砕くような答えだつた。

クロノ「その通りだ。僕も最初は信じたはなかつたが、調べれば調べるほどアリサが『適合者』であることが明らかになつていつた。

「

はやて「だから、偶然では無いんや。」

なのは「でもでもつ、その犯人の目的つてなんなの？」

クロノ「そこは予想でしかないが、たぶん管理局にアリサが連れて行かれる前に最後の『適合者』の抹殺か、アリサを使ってでの次元世界の破壊と殲滅だらう。」

なのは「抹殺つて、早くアリサちゃんを助けないとアリサちゃんが・

・「

クロノ「だが、やはりと言つてその可能性は無いな。それなら『贊  
殿遮那』と『天壌の劫火』を管理局から盗み出すという危険を冒す  
必要はないからな。だからと言つて、後者もありえない。アリサが  
人を殺すような人間ではないことは誰でも分かっているはずだ。」

そのとき、私には考えがよぎつた。

なのは「じゃ、じゃあ。もし漫画みたいに、アリサちゃんが洗脳さ  
れちゃつたら?」

クロノ「それも無いなと言つより、そんな術式は存在しない。そん  
な術式があれば世界中の人間が洗脳されてしまつし、術式で発動す  
るならAMFで効力が無くなつてしまつるのは魔導師であれば誰でも  
知つている。」

なのは「あうう……。」

クロノ「犯人の目的が分からぬ以上、へたに行動するのはマズい。  
今は様子見をしてあまり動かないようにしたいんだが、異論は無い  
な?」

シグナム「ああ、そうだな。あまり一般人を危険にさらす訳にはい  
かないからな。」

シグナムさんがそう言つた瞬間、結界がはられた。

ユーノ「封時結界！？」

クロノ「あちら側から行動を起こすとは・・・。アリサの安全確保が優先だ！速く移動のできるフュイトはなるべく急いでアリサの元へ。」

フュイト「うん、わかった。バルティッシュショーヴよ。」

(Yes - Si!)

フュイトちゃんの服がバリアジャケットに変わり、続いてソーツクフォームへと変身して颯爽と飛び立った。

クロノ「僕たちも続いて行くよ！」

クロノ君の声とともに私たちもバリアジャケットを装着、そしてアリサちゃんの元へ飛び立つた。

## 第2話「一つのロストロギア」（後書き）

もしかしたら次でアリサが覚醒するかもしれません。予定です。あまり期待しないでください。正直自分は文系の成績が壊滅的だったので変な分とか普通にはいつてると思います。

### 第3話「イルミナ・アレイズ」（前書き）

すいません、少し日が空いてしまいましたね。

### 第3話「イルミナ・アレイズ」

『フェイト side』

フェイト（はやく・・・はやくアリサの元に・・・手遅れになる前にっ！）

私は今、空を高速で飛んでいる。私のはるか後ろをはなのは達がついて来ているのを確認して前方を見ると、空中に何かが浮かんでいるのが目に留まった。近づくにつれてそれは人の形をしているのが分かつた。性別は男のようで、真珠のような色の髪は背中まで伸びてあり、それを後ろで束ねている。バリアジャケットを着ているところ魔導師で間違いないだろう。と、軽く推察する。そして、その男は背中に布で包まれた、だいたい1mくらいの長さの何かを担いでいる。その中身はおそらく『贊殿遮那』であろう。こんな所で、そんな長さのものを持つているとしたら『贊殿遮那』であると考えるのが自然だろう。

フェイト「時空管理局嘱託魔導師フェイト・T・ハラオウンです。すぐに『贊殿遮那』と『天壌の劫火』の二つのロストロギアをこちらに引き渡してください。そうすればあなたにも弁護の機会があります。」

私はそう告げると、バルディッシュを男に突き出した。だが、男はそれを鼻で笑い、そして口を開いた。

????「危険を冒してまで手に入れたものをそつ簡単に渡すと思つか？」

フェイト「早く渡しなさい…さもないと…」

????「さもない」と?」

フェイト「公務執行妨害および遺失物不正所持の現行犯、遺失物窃盜の容疑であなたを逮捕します！」

????「ハツハツハツ…」いつは傑作だ！相手の力量も知らずよくそんな事が言えるな。やれるものならやってみろ！力づくでなあ！いくぞ、ヴィゾーヴニール！」

(Yes -Siri!)

フェイト「行くよ、バルティツシユ！」

(Yes -Siri!)

男の持つデバイスは最初、腕輪の形をしていたが男の声とともに1.5mの黒い棒状に伸び、上の先端部から刃が飛び出した。刃の中心には真珠色に輝く六角形の宝石が埋まっている。

一つのデバイスの柄の部分がぶつかり、鈍い音とともに火花を散らしている。

フュイト（やっぽり、力押しじゃ勝てない。力が駄目なら頭を使つて・・・）

私は一旦男から離れて、様子を見る。男はどりゅう動く気配が無くこちらを不審そうに見つめている。

「？？？」どうした？かかつてこないのか？」「

フュイト（相手の挑発に乗つては駄目だ。考えなきゃ・・・せりふやつて勝つかを・・・）

フュイト「よしつー！」

作戦はだいたい決まった。別に相手を倒さなくてもいい、捕まえて動けないようにすればいいんだ。私はそう考へ、作戦のためまず相手の動きを確かめる攻撃に移る。

フュイト「プラズマランサー・・・ファイアー！」

私はそう言ひて、プラズマランサーにわざと隙間を空けて30発同時に放つ。

「？？？」そんな甘い攻撃は当たらない。「

男はそつ言つと、必要最低限の動きで隙間のある左側へと体をそらした。私は作戦に気付かれないように、プラズマランサーを爆散させる。確認のためもう一度プラズマランサーをわざと隙間に空けて30発放つ。

そうすると予想どおり、相手は必要最低限の動きで隙間に避ける。

フェイント（相手の動きは分かつた。これで勝てるー。）

私はそつ考え、相手の真上に気付かれないようにバインドを仕掛ける。

フェイント「プラズマランサー・・・ファイアー！」

？？？「3度目の正直とよべ言つが、これは2度あることほ3度あるだな。」

男はそつ言いつつ、必要最低限の動きでバインドを仕掛けている真上に体をずらした。

フェイント（ー・・・掛かった！）

男が移動した瞬間バインドが発動、男を縛り上げる。そして通り過ぎたプラズマランサーが方向転換し、男に直撃する。

？？？「ぐああつー？まさか」「今までやるとは……」

男がそう言った所で、クロノ達が追いついた。

クロノ「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。管理外世界での魔法の使用および遺失物違法所持の現行犯で逮捕する！」

？？？「おやおや、管理局の執務官まで来るのは……まあこれも計算内だつたが……。」

クロノ「貴様、名を名乗れ！」

？？？「俺か？俺は元時空管理局執務官イルミナ・アレイズだ。」

クロノ「イルミナ……アレイズ……だと……？」

イルミナ「いかにも。この俺がイルミナ・アレイズだ。」

クロノ「そんな……馬鹿な……だつて……死んだはずじゃ？」

フェイト「クロノどうしたの？イルミナ・アレイズって？それに元時空管理局執務官？」

クロノの話によると、イルミナ・アレイズとは9歳という若さで、一度も試験に落ちず執務官になったと言う天才らしい。何より、魔

力量はA Aでさらに魔力変換資質の中でも特に希少な凍結を持っている、生まれながらにしての超天才だったらしい。だが、3年前のある事件のあと行方不明になり、それ以来管理局内では死亡していることになっているらしい。

イルミナ「まったく、勝手に殺してもらつては困るな。」

フェイト「元執務官なら、今あなたのしていることがどれだけ重い罪なのか分かつていいはず！」

イルミナ「分かつているさ。俺はそれを承知の上で今まで準備を進めていたんだからな。」

そこで、状況がよく掴めていないのはが痺れを切らしたように口を開いた。

なのは「とりあえず、よく分かんないけど早くそのロストロギアを渡してほしいの！」

ヴィータ「そうだー わたと渡しやがれー！」

そこでシグナムも無駄話はもう終わりだといった感じで、イルミナに向かって言葉を放つ。

シグナム「今この状況下で我々から逃げられると思っているのか？」

そこでイルミナが不適に笑い出した。

イルミナ「ただで逃げられるとははじめから思っていない。まあこの状況も計算の内だつたからな・・・手は打つてある。」

イルミナが拳に力を入れると同時に、彼を縛っていたバインドが凍りだした。

クロノ「なつ・・・！だがこの戦力差では逃げられないっ！」

イルミナ「それはどうかな？」

イルミナが指をパチンと鳴らすと、イルミナの横から群青色の魔方陣が現れ、さらにそこからバインドで縛り上げられた少女が現れた。

その姿に、一同は言葉をなくす。バインドに縛り上げられた少女それは・・・

なのは「すずかちゃん！？」

月村すずかだった。

### 第3話「イルミナ・アレイズ」（後書き）

まだ、アリサが覚醒しない・・・次話でいけるかな？

## 第4話「眞実」（前書き）

あけましておめでとう、今年もこい年になるといいですね。  
設定を少し変えました。気付きました？

## 第4話「眞実」

『アリサ side』

時間は遡つて、学校の教室。

アリサ「・・・なら仕方ないわね。じゃつ、また明日。」

なのは「うん、また明日ね。」

そう言つたなのは達と分かれたあたしはすずかと一緒に下校することにした。

アリサ「なーんか。むつきのなのは達の反応・・・引っ掛かるのよねえ。」

すずか「そつ? 私にはそつは見えなかつたんだけどな。」

アリサ「なーんか隠し事してるみたいだつたんだよね。なのはは隠し事得意じやないから顔見ただけで一発、丸分かりよ!」

すずか「アリサちゃんは鋭いね。私にはぜんぜん分かんなかつたよ。」

アリサ「すずかは鈍すぎなのよ!」

すずか「そんなことないよ～。」

アリサ「だつて、あたしの気持ちに気付いてくれないんだもん。」

すずか「え・・・? 何か言つた?」

アリサ「何も言つてないわよ! さつ、帰りましょ!」

すずか「え～? 絶対何か言つたでしょ? お～しつえ～て～。」

こんな感じで普段と何も変わらない日々を送っていた。いつまでもこんな時間が長く続けば良いなあと、思いながら鮫島の待つ車まですずかと一緒に歩いた。

だが、その変わらない日々が一瞬にして崩れ去ることとなるとは誰も思いもしなかった。アリサにも、すずかにも、もちろんなのは達にも・・・

### 『すずか side』

すずか「それじゃあ、アリサちゃんまた明日ね。」

アリサ「うん、また明日。」

アリサちゃんにそう言つて、車を運転してくれた鮫島さんにもお礼を言つ。鮫島さんは「いえいえ、礼には及びませんよ。」と笑顔で答えてくれた。アリサちゃんを乗せた車が月村邸から離れていくのを見送っていると、ノエルさんが声をかけてきた。

ノエル「すずか様、お外に出ていては風邪を引かれます。早く邸の中へ入りましょう。」

すずか「はいっ。」

そうして私はノエルと共に邸の中に足を踏み入れた。時間が気になり、ふと時計を見てみると、今はちょうど3時半だった。特にすることも無いので、今日課された宿題と明日の授業の予習をしておくことにした。

気付くと時計は4時をすこし過ぎたところだつた。

すずか「もう4時・・・宿題は5分で済んじゃつたし、予習ももう十分。暇だなあ。」

私がそう呟くと、まだ明るかつた空が突然暗くなつた。と同時に邸から人の気配が消えうせた。以前にもこんな経験があつた気がして窓から外の景色を眺めてみた。

すずか（ここの感じ、去年の冬と同じ……でもまたなのはちやん達が何とかしてくれるはず。）

私はそう思い、また窓の外へ目を向ける。しばらくして遠くで金色の光が飛んでくるのが見えて、突然その光が止まつたように見えると、そのまま近くで爆発が起つた。

すずか（あの金色の光はフロイトちゃんかな？でも確かあの辺はたしか・・・アリサちゃんの家のすぐ近く！…）

すずか「アリサちゃんが危ない！早くアリサちゃんの元にいって無事か確かめないと…。」

そしてすぐにコートを着て、外へと飛び出した。

道のりにして約1？だいたい10分くらいかなと考えながらアリサちゃんの家へ走つて行つた。走つている途中に爆発が止み、ピンクや青や白などの光が金色の光に集まつていぐ、それに気を取られていて気付かなかつた。足元に光る群青色の魔方陣に・・・。

私は気付いたのが遅くて気付けば手足は縛られ、強い光と共にどこかへと飛ばされた。

すずか（アリサちゃんの言つ通り、私は鈍いのかな・・・。）

すずかを車から降ろしたあと自宅に到着した。鮫島がいつものように戸を開け、あたしはいつものように車から降りる。家の中に入るとあたしはすぐに自分の部屋に向かつた。

時計を見ると3時40分だった。宿題をする気も起こらず、あたしはテレビゲームをすることにした。いろんなアニメキャラが出てくる格闘ゲームだ。あたしのお気に入りは『シャナ』っていうキャラクター。詳しいことは良く分かんないけど、刀とかが使いやすい。せうやつてゲームに集中しているときなり電気が消えた。

アリサ「あああっー今いいとこだつたのにっーなによーっこんなときに停電なんて電力会社はなにやつてんのよーっ！」

あたしは邸内に響くほどの大声で叫ぶ。だが、誰も来る気配がない。

アリサ「誰かー、誰かいのー？鮫島ー？」

アリサ（おかしいわね、誰も来ないなんて。家の中には絶対誰か一人はいるはずなのに・・・。）

と、思つたが周りからは物音一つ聞こえない。まるで、この邸にはアリサ一人しかいないような、そういう感じだ。たしかこういった経験は以前にもあった。それは去年のクリスマス・イブの出来事だ。そしてその日は初めてのは達が魔法使いであると知った日で

もあり、自分のあまりの無力さを悔やんだ田でもあった。

アリサ（また、なのは達がうまくやつてくれるでしょ。別にあたしが関わることもないし……。）

そのとき、突然近くで爆発音が聞こえた。窓から外を覗くと、金色の光と人影が戦闘を始めている。金色の光はすぐフェイトのことだと分かり、人影は今の状態の犯人であることも分かる。あたしは今日の放課後の隠し事がこの事だつたのかと思い返す。

アリサ（だけど前の前に……。）

アリサ「あたしん家の近くでやんなくてもいいでしょうがっ！」

怒鳴つても誰にも聞こえていないことは分かつていたが、怒鳴らずにはいられない。もし自分の家に流れ弾が当たつたらと、考えるといてもたつてもいられない。それにもし自分のところに流れ弾が来ればひとたまりもないだろう。なのでとりあえず安全そうな場所へ避難することしようと思つてドアノブに手をかけた。

が、ドアノブが回らないことに気がついた。

アリサ「あ・・・あれ? ど・・・どうなつてんのよ? なんでドアノブが回んないのよー?」

どれだけ力を入れても回りきりにない。

アリサ（こうなつたら、ドアに体当たりしてドアを壊すしかないわね。壊れた理由なんてなんとかなるわよ。）

アリサ「いや、にの、さん！」

あたしは思いっきり飛んでドアに突撃する。が、今度はドアの前で体が止まり、そのままゆっくりと床に落ちられる。

アリサ（多分魔法かなんか掛けているんでしょうね。これじゃあどうしようもないわ。）

あたしは諦めて、ソファに座り込んだ。

アリサ「やっぱあたしひて無力だなあ。」

そう思っていると、足元に群青色の円が出現した。とっさに離れよしどしたが遅かった。光と共にじこかへと飛ばされた。

なのは「すずかちゃん！？」

イルミナ「今、魔法で眠らせてある。」

ヴィータ「人質とか卑怯だ！」

イルミナ「ふつ、争いに卑怯もクソもあるものか。俺はここで捕まる訳にはいかないのでな、いちいち手段なんか選べるはずもなかろう。」

シグナム「ぐつー。」

イルミナ「もし動けば、どうなるか分かつていいな？」

イルミナ（ふつ、動いても動かなくても結末は同じだ。アレの覚醒を促すにはこれが一番手っ取り早い。）

俺は遠隔転送魔法をもう一度発動してアレをここから50m離れた場所に連れ出す。さらにアレに幻術魔法を掛けることも忘れない。

イルミナ「準備は整った！俺の計画が今この瞬間から始まるー。」

なのは達「ー？」

イルミナ「この少女を生贊にして、古代ベルカの力を田覚めさせよ。」

「

イルミナ・アレイズは月村すずかの背中に手を当て詠唱をはじめ  
る。

クロノ・ハラオウンが叫びながらイルミナ・アレイズに向かつて飛び出すがその甲斐もなく、ぐさりと肉を貫き通す音が鳴り響き、月村すずかの体から鋭い氷の槍が突き出てきた。そこからは赤い液体がぽたぽたと垂れてきている。

『なのは side』

私は動くことができなかつた。親友であるすずかちやんが目の前で鮮血に染まつていくのをただただ見ていることしかできない。手足が震え、吐き気が止まらない。周りのみんなは田を見開き、驚愕という感情を顔に貼り付けている。

クロノ「貴様あああああああああつ！」

クロノの叫びでみんなが正気に戻る。

鼻で笑いながらイルミナがすずかちゃんを放り投げた。迷わず私はすずかちゃんを受け止めるために飛び出す、フロイトちゃんもはやてちやんも考えは同じようだった。

なのは「すずかちゃんああん！」

ギリギリセーフですすかちゃんをキャッチした私は、すずかちゃんにまだ息があることを確認した。安心したところでフェイントちゃんはやてちゃんの方に振り返ると、一人とも驚きを隠せない様子で私の方を見ていた。正確に言つと、私の後ろを見ていた。なので私は振り返り一人の目線の先を確認する。そこにいたのは・・・。

なのは「アリサちゃん？」

すずかちゃんと私達どちらともことつて親友と呼べる存在。アリサちゃんであった。

## 第4話「眞実」（後書き）

次こそはアリサを覚醒させたいです。

第5話「嘘」

アリサ side

あたしが気付いたとき、道路の上に立っていた。上方からなにやら話し声が聞こえてくる。

？？？？「人質をとるなんて卑怯だぞ！」

真珠色の髪をした男がそう言つた。

？？？？「君が黙つて我々について来れば月村すずかに害は加えない。」

アリサ（えつ？あれってクロノ？周りにはヴォルケンリッター達や  
なのは達もいる！？）

ヴィータ「そうだ、だけどこんなやつ人質にとつても無意味じゃねーか?」「

クロノ「それもそつだな。こんな足手まとい居るだけで邪魔だ。」

町「アラカルト」で、お子様の誕生日会や記念日など、お祝いの席に

あたしは見た。クロノがすずかの背中に手を当て、術を発動、そして氷の槍がすずかを鮮血に染め上げる様を。そしてクロノがすずかをこちら側に放り投げてこう言った。

クロノ「なのは、フェイト、はやて死体を処理しろ。」

三人「了解。」

そして、三人がこちらに向かつて来る。逃げようにも逃げられない。親友と思っていた人間が親友が殺されたのを見て何も感じていない。その恐怖があたしの体中に溢れて、より体を動けないようにしている。

なのは「あ・・・。アリサちゃん居たんだ。」

フェイト「見ていたんだね。ずっと・・・。」

はやて「・・・。」

気が付かれてしまった。あたしの体の震えが止まらない。体が動かない。でも口は勝手に動く。

アリサ「あ・・・。あんた達、何も感じないの?思わないの?だってすずかが・・・すずかが・・・すずかが死んじゃったのに、何でそんな涼しい顔して立つてられんのよっ!」

それには達が答えた。絶望的な答えをアリサに言い渡すため  
に。

なのは「こんな足手まとい死んで当然だよアリサちゃん。」

フェイト「なんの力もないのに、飛び出してくるからいつなるんだ  
よ。」

はやて「正直邪魔やつたわ。あんたもすずかも守られてばっかりで、  
少しは守る側の事情つても考えたらどうなんや。」

あたしは言葉を失った。あまりの絶望感に心身ともに追いつかな  
い。頭がだんだんクラクラしてくる。だんだんと意識が遠のいてい  
く。意識を失う寸前男の声が聞こえた。

男「この娘だけはやらせない。」

そしてあたしは意識を失った。

『なのは side』

私の目の前にはアリサちゃんが居た。驚愕に目を見開いている。

フロイト「アリサ……」めんすずかを守ることができないで……  
・。  
」

はやて「……」めんな。  
」

一人が口々に謝罪の意を述べる。しかし、アリサちゃんはその言葉がまったく聞こえてないような感じで動かない。と、思っていたらこきなり口を開いた。

アリサ「あ……あんた達、何も感じないの?思わないの?だつてすずかが……すずかが……すずかが死んじやつたのに、何でそんな涼しい顔して立つてられんのよつー」

三人「……えつ?」

私達にはアリサちゃんの言つている意味が分からなかつた。すずかちゃんにはまだ確かに息がある。それなのにアリサちゃんは今、死んだと言つた。明らかにアリサちゃんの様子がおかしい。そう考えたとき、ドサリとアリサちゃんが倒れた。

なのは「アリサちゃん!？」

私が叫ぶと同時にやはやてがアリサちゃんのところに向かつ。

はやて「大丈夫や。氣を失つとるだけや。」

その瞬間、ドガツといつ打撃音とともに「はやてが突き飛ばされた。

はやて「な・・・なんや？」

突き飛ばした張本人はイルミナ。

イルミナ「この娘は貴様らなどには渡さん。俺にとつて大事なモノ  
なのでな。目的は果たした。御暇させていただく。」

そして、私達が駆け寄るよりも早くどこかへ消えてしまった。

なのは「すずかちゃんだけじゃなくアリサちゃんも助けられなかつ  
た・・・。」

ユーノ「・・・・・・・。」

フュイト「くつ・・・・・。」

はやて「私が早くアリサを連れて行けばこんなことにはならんかつ  
たんや！くそつ！なにが夜天の書の主や！守るために力じやなかつ

たんか！？」

シグナム「主の友を傷つけてしまつなど、ヴォルケンリッター失格  
だ・・・。」

ザフィーラ「この体たらくでは、守護獣の名が泣く！」

ヴィータ「ちうくしょおおおおおおおおおお！」

クロノ「こんな程度の力でよく僕は時空管理局の執務官なんてやつ  
ていられたものだ。」

みんな口々にたくさん怒りと後悔を自分にぶつけている。

こうして事件は始まつた。月村すずかの重傷と、アリサ・バーン  
グスの誘拐で。

## 第5話「嘘」（後書き）

作者「以上でプロローグはお終い、次からやつと本編だつぜー！」

アリサ「ちょっとー？プロローグ長すぎなんじやない！？いい加減  
読者もあきれて別の小説読んでんじやないのー？」

作者「はつはつは、スマン~~~~」

アリサ「笑つて済ませられることじやないわよー！」のばかつー！

作者「もつと馬鹿つて言つて～。」

アリサ「バカバカバカバカバカバカバカばかあああああつー！」

作者「もつともつーと。」

ザフイーラ「こいつキモイな。」

作者「うつせー！」

## 第6話「『宝具』」（前書き）

作者はヴォルケンズが大好きです。ヴォルケンズの中でランク付けするなら  
一位シグナム、二位ザフィーラ、三位ヴィータ、同じく三位シャマル  
です。

## 第6話「『宝具』」

月村すずかが重傷を負い意識不明の重体になり、アリサ・バーングスが誘拐された日の翌日。

『なのは side』

今日の朝はなかなか起き上がることができなかつた。眠れなかつたのだ。無理もない、昨日あれだけのことが起これば誰だつて精神に異常をきたす。

すずかちゃんとアリサちゃんは交通事故で、二人とも意識不明の重体で県外の最高の設備が整つた病院に入院したとなつていて。実際は、すずかちゃんはミッドチルダの医療施設で治療を受けていて、アリサちゃんは生死不明の行方不明である。

### キーンコーンカーンコーン

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。正直、授業の内容は殆ど頭には残つていない。午前の授業が終わりクラスメイトが弁当を持ってお昼ご飯を食べに行く中、三人だけ全く動こうとしない。まるで魂が抜けたように目が虚ろになつていて。そこにクラスメイトが話しかける。

クラスメイトA「大丈夫だつて、一人は必ず助かるつて。だからそ

んなに氣を落とすなよ。お前りりしへねーぞ。」

クラスメイトB「やうやく、それに交通事故なんだから、別にあなた達が後悔するようなことはなにもないよ。ほら、笑って笑って。」

私達に氣を使って、励ましてくるクラスメイト。するとまやはてちやんが顔あげて口を開く。

はやはて「せやな。落ち込んでたつて別にすずかりやんとアリサちゃんが帰つて来る訳がない。そんなひ、いつ帰つてきてもええようこ私は笑つて待つてればええんや。すまんな氣使わせてもうつ。ほら、なのはひやん、フロイトちゃん分かつたら顔あげんかい。」

フロイト「そうだね。」

なのは「うそ・・・じゃあお弁当食べようか?」

はやはて&フロイト「うんー。」

そうして、談笑しながらお弁当を口に運ぶ。笑つてはいられないが後悔していたつてなにも帰つてこない、だから気持ちを切り替えて今は笑つていようと、三人で決めた。この学校の中では・・・。

キーンローンカーンローン

午後の授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。今日は金曜日で明日は土日。クラスメイトのみんなは「また来週。」といつて帰路についている。週が明けた水曜日は終業式でそこから冬休みに入る。私達三人は今一緒に帰路についている。

はやて「明日、明後日は学校は休みや。なんとしてでもアリサちゃんを見つけ出すんや！」

フェイト「でも、あれから魔力反応は一切検出されてないよ。さつきエイミイから通信で訊いてみたんだ。もちろん海鳴市周辺の都市にも範囲を広げての搜索もしたけど引っ掛から無かつたって言つてた。」

なのは「うーん。でも、もしかしたら別の世界に転移しているかもしないよ？」

今は念話会議中である。一般人に聞かれるのも嫌なので念話で会議をしている。「嫌な理由は言つまでも無かる」会議の参加者はなのは、フェイト、はやて、リンディ提督、クロノの計5人である。

クロノ「その線もあるな・・・なにせ相手の目的が未だはつきりしないからな。アリサ・バニングスを使ってでの次元世界破壊をするなら地球に居る意味もないしな・・・。」

はやて「次元世界単位での搜索はやってるんか？」

クロノ「今、管理局で総勢を挙げて捜索している。」

なのは「か・・・管理局全体で！？」

リンディ「当たり前じゃない。なんたって、下手したら次元世界の一つや二つ余裕で破壊できるほどの力よ。管理局が放つて置く訳無いじゃない。」

クロノ「だが・・・まだ完全に『贊殿遮那』と『天壤の劫火』についての完全な詳細データは判明していない。昨日話したことにはしかしたら間違っている可能性もある。」

フュイト「それじゃあアリサが『適合者』だつて言つのは・・・」

クロノ「残念だがそれに間違いは無い。今、完全な詳細データに関してはユーノに調べてもらつていい。」

リンディ「それと、あなた達三人はお家に帰り次第アースラまで来ること。はやてちゃんはヴォルケンリッターも連れて来てね。これにて会議はお開きとします。」

三人「はいっ！」

そしてアースラ会議室にて

クロノ「みんな集まつたな。これから今後の対策として会議を始め

る。」

クロノ君がそう言つて会議を始める。ヴォルケンリッターの人達は昨日の一件から立ち直つてゐる様子なので一先ず安心。

クロノ「さつきユーノから通信が入つた。どうやら情報を掴んだようだ。その情報を踏まえて会議を進めて行こうと思つ。それじゃあユーノ、説明頼んだ。」

ユーノ「うん。それじゃあ説明に入るね。まずは『贊殿遮那』と『天壤の劫火』の関係について話すよ。『贊殿遮那』と『天壤の劫火』これが一つで一つのデバイスであることには間違いない。そして本体は『天壤の劫火』であることが新たに分かつた。それも融合型デバイス。そして『贊殿遮那』はロストロギアではなく、正確には『宝具』と呼ばれるものらしいんだ。そしてその『宝具』は『贊殿遮那』一つだけではないことも分かつたんだ。でも『贊殿遮那』自体にもその他の『宝具』に関しても詳細な記述はされていなかつたよ。

なのは「でもでもつ、ロストロギアとその『宝具』つて何が違うの？」

ユーノ「いい質問だね、なのは。ロストロギアつて言つのはそれ単体に何らかの力があるでしょ。例えば、ジュエルシードは一つだけでも次元震を起こすほどの力を持つてゐる。でも、その『宝具』つていうのは記述によると使用者の魔力を消費して力を発揮するらしいんだ。

クロノ「だが、それくらいの物は何処にでもあるはずだ。なんならデバイスを『宝具』といつてもいいんじゃないか？」

ユーノ それはちょっと違うかな。『宝具』はデバイスのような変形を行わないし、魔力を込めれば絶大な力が発揮される。

私は『宝具』について大体理解したが一つ気になることがあるので、ユーノ君に訊いてみた。

なのは「じゃあ、『天壤の劫火』はなんなの？ロストロギアなの？」

ユーノ ああ、それはあってる。けど、『天壤の劫火』にはクセがあつて『天壤の劫火』が力を発揮するのではなくて、『適合者』が力を発揮するんだ。だけど『天壤の劫火』自体にも力があるのは管理局の調査で分かっているんだ。けど・・・

フェイド「そこがよく分からんんだね。」

ユーノ そうなんだ。どんな古い文献を調べてみても書いてあることはほとんど同じ・・・それに文献の数も少ない。以上が僕の調べで分かったことだ。あまり力になれなくてゴメン。

なのは「そんなことないよ。ユーノ君頑張ってくれてありがとう。」

ユーノ あはは・・・ありがとう。

クロノ「じゃあ今後の対策についてなんだが・・・」

と、クロノ君が言いかけた途端、艦内にブザーが鳴り響いた。

はやて「な・・・なんやー?」

シグナム「敵襲か!？」

ヒュード、ハイミィさんから通信が入った。

ハイミィ 海鳴市上空に魔力反応、推定AAランク。もしかしたら  
昨日のヤツかも・・・それと一緒にアリサちゃんの生体反応をキャ  
ッチしたよ!

私達は急いでアースラのブリッジに向かった。

## 第6話「『宝具』」（後書き）

作者「相変わらずのこの不定期更新いつか更新が途絶えてしまうのか・・・。」

アリサ「それだけは勘弁して、あたしあまだ活躍してないんですけど・・・。」

ザフィーラ「俺もだ。」

シグナム「レヴァンティンが血を欲している。」

シャマル「治療したい、手術したい・・・ハアハア。」

ヴィータ「この一人ヤバイ。目が血走ってる。」

シグナム「演技だ。」

シャマル「冗談です。」

作者「こいつらの演技力パねぇ」

アリサ「話を逸らすな！」

作者「ごめんなさい。更新はちゃんと続けますよ。相変わらずの不定期更新になると思いますが・・・。よろしくおねがいします。」

## 第7話「天壌の劫火」

『なのは side』

ブリッジに全員集まつたことを確認してリンクティさんが話し始めた。

リンクティ「先ほどエイミィからの報告どおり、イルミナ・アレイズと思われる魔力反応とアリサちゃんの生体反応が海鳴市上空に現れたわ。一刻も早くアリサちゃんを保護しましょう。イルミナの確保はその次よ。みんな行つてらっしゃい。」

クロノ「かあ・・・提督、他の魔導師部隊は?」

リンクティ「今こちらに向かっているわ。あと数分で到着よ。」

クロノ「分かつた。みんな今すぐ出るわ。」

一同「はいっ!」

そして私達は転送ポートまで行き、海鳴市上空に転送された。

『イルミナ side』

今自分の目の前に、魔導師8人と小さいのが1人転送ってきた。俺の横にはアリサ・バーニングスが立っている。決意に満ちたい表情をしている。

イルミナ（だが、まだあと少し足りんな。あの提督が出てこれば足りるんだが・・・。しょうがない、あと数分もすれば魔導師部隊が来るはず・・・時間を稼ぐか。）

考え事に耽つていると、正面で誰か叫んでいる。たしか名前はクロノ・ハラオウンとか言つたやつだ。

クロノ「いやうらにアリサ・バーニングスを引き渡すんだ！君が何をしているか分かつていてるのか！？」

イルミナ（ははっ、その言葉は逆にアリサの神経を逆撫でするぞ。ほら、アリサの顔が憎しみでいっぱいだ。）

イルミナ「別に俺は彼女を拘束しているわけじゃない。見れば分かるだろ。」

そこで確か昨日フォイト・T・ハラオウンと名乗った少女がアリサに向かつて声をかける。

フロイト「アリサ、早くこひに来てーその男は危なじよー。」

イルミナ（アリサにとつて怖いのはお前の方だ。今から貴様らに絶望を植え付けてやる。）

イルミナ「アリサ、行きたいのなら行け。お前の好きにしろ。」

俺がそいつた途端、やつらの表情が明るくなつた。だがそこまでだ。

アリサ「嫌だ。向こうには行きたくない。あたしはアレンところ。」

アリサが言葉を放つ。やつらは訳が分からぬといつた様子で明らかに動搖している。

イルミナ（当然の結果だ。）

俺は心の中でほくそ笑んだ。

クロノ「貴様いつたいアリサに何をしたー。」

イルミナ「俺は何もしていないさ。彼女の意思だ。田を見てみる。」

アリサの瞳には一点の曇りもなく、洗脳されている様子は全く窺えない。と、そこにて封時結界がはられる。おそらく魔導師部隊の到着だろ、」

イルミナ（よひやく來たか。そろそろ始めるか。）

イルミナ「アリサ、今から君の力を開放する。覚悟はできたかい？」

アリサ「覚悟なんてとっくの昔にできてるわよ。早く始めなさい。」

クロノ「力を・・・解放だつて？」

イルミナ「そうだ。アリサには元々魔力資質がある。」

クロノ「そんな筈は無いー。管理局でもデータが出ている。」

イルミナ「ちゃんと調べたのか？アリサに封印魔法が掛けられていることを。」

クロノ「封印・・・魔法？」

イルミナ「君達は知らないようだが、俺が管理局で真面目に働いていた頃に知ったことだ。どうやら管理局の暗部の仕業らしいが・・・アリサにはそいつらによつて何重もの封印魔法が掛けられているんだ。それを今・・・開放する。ここに居るすべての魔導師の魔力を使って！」

クロノ「なにつー？だからわざわざここまで出てきたのかー？ぐそつ、シャマル、すぐに転送の準備を・・・。」

イルミナ「無駄だ。もう遅い。起きろヴィゾーヴニル仕事だ。ブレイク・ア・シール！」

(Yes, My master. Break A Seal!)

俺が長年の努力を重ねて作り出した、封印強制破壊の術式を発動させる。それと同時にアリサの胸元から弱く光るリンカーコアが現れた。そしてアリサの目の前に握り拳と同じくらいの群青色の球体が現れる。そこから俺を含めた結界内の全ての魔導師に向けて太さ1cmの紐が放たれる。だが、それに抵抗しようとクロノが味方全員にシールドをはる。

イルミナ「はっはっは！ 抵抗は無意味だ。元々封印や結界の破壊を目的とした術式なんだ。シールド」ときで防げるはずが無い。」

クロノの抵抗も虚しく、魔導師全員の胸元に紐が張り付く。そして魔力が群青色の球体に吸われていく。

イルミナ「こいつは魔力を全て吸い尽くすまで止まらん。安心しろ死ぬことはない。現に俺も吸われているからな。ただ、尋常じやない疲労感が後から来る。アリサ後は頼んだぞ。」

アリサ「分かつた。」

そう言つている間に魔力を全て吸い尽くした。もちろん全員既に地上に降り立つてゐる。俺は袋の中から『贊殿遮那』と『天壤の劫火』を取り出す。すると、その一つがアリサの目の前に浮遊し、『天壤の劫火』が燃え盛るように光出す。

トクン・・・トクン・・・

群青色の魔力球がアリサのリンカーコアと『天壤の劫火』を管で繋ぐ。すると『天壤の劫火』から声が聞こえてくる。

天壤の劫火「我が名は天壤の劫火アラストール。まさか、この世にまだ私を收められるほどの力を持つものが居ようとは・・・。」

アリサ「あたしの名前はアリサ・・・アリサ・バーニングス。」

アラストール「アリサ・バーニングスか・・・。ところでアリサは私の主となる身か?」

アリサ「そうよ。」

アラストール「よからう。私の主となるには十分すぎる力だ。君に掛けられている封印魔法はもうじき解ける。それまでに契約を済ませよう。それでは、君の手で私に触ってくれ。」

アリサ「うん。」

アリサがアラストールに触れた。

## 第7話「天壤の劫火」（後書き）

作者「相変わらずの駄文だな。うんうん。」

アリサ「自分で言って自分で納得するな。」

作者「そういうても本当なんだからしか！」

ドガツ

アリサ「あんたなんて知らないっ！」

作者「そ、そんな。行かないでくれ、そして嫁口」

ザフィーラ「駄目駄目だな、この作者。」

第8話「決意」

時間はすこし遡る。

『アリサ side』

すずかが目の前で血まみれになつて倒れている。その傍らには顔を狂氣で歪めたなのは、フェイト、はやての姿がある。

「すずかちゃんにはね邪魔だつたから消えてもいい」といってたんだ。

フエイト「正直どっちを消すか迷つたんだよ。」

はやて「せやけど、いずれアリサちゃんにも消えてもらわなあかんねん。ちょうどええわ今消えてもうらつわ。」

アリサ「はつーはあはあ。」

どうやら今まで寝ていたらしく布団が掛けられていた。

アリサ「ゆ・・・夢?いや・・・違う。」

自分の部屋とは全く逆で何も無いただの白い部屋の中のベッドの上であたしは寝ていた。遠くからは話声が聞こえる。

? ? ? 「ああ、成功した。問題ない・・・今寝かせてある。ああ、分かっているわ。そちらは?・・・そうか順調だな。・・・それはまだ。今日実行するつもりだ。おや・・・いやなんでもない。起こしてしまったようだ、これで切るぞ。ああ、じやあな。」

ピッ

? ? ? 「目が覚めたか。起にしてしまったか?」

アリサ「ううん・・・あなたは誰?」

? ? ? 「俺か?俺はイルミナ・アレイズ気軽にアレンヒドも呼べばいい。そしてこの腕輪みたいなのが俺の相棒のヴィゾーヴールだ。」

(Nice to meet you.)

アリサ「な・・・ないすとーみーとー。それでこーんな?」

イルミナ「おっと、君の名前をまだ聞いてないぞ。」

アリサ「す・・すみません。あたしの名前はアリサ・・・アリサ・

バーニングス。」

イルミナ「おや・・・」」では変わった名前だな。一ホンジンじゃないのか?」

アリサ「いえ・・・あたしはたまたま日本生まれなだけです。一応日本人・・・なのかな?・・・それより」」は?」

イルミナ「そうだったな。」」は俺ら一人の隠れ家だ。あまりつらい思いをさせたくないが・・・昨日のことは覚えていいかい?」

アリサ「うう・・・はい。」

イルミナ「それより・・・すごい汗だな。悪い夢でも見たか?風呂に入つて汗を流してくると良い。こんなこともあるつかと沸かしておいて正解だつたな。それと服は洗濯機に入れておくといい。代わりの服は・・・これしかないが我慢してくれ。」

と言つてあたしにバスローブを手渡してきた。

アリサ「これ・・・服じゃないし・・・。」

イルミナ「すまないな。サイズが分からなかつたから」」なんものしか無いんだ。」

アリサ「ま・・・いいわよ。じゃあお風呂借りるね。アレン。」

イルミナ「ああ。洗濯機に服を入れたら回しておいてくれないか?」

アリサ「わかつた。それじゃ入つて来るね。」

あたしは服を脱ぎ、洗濯機に入れ、洗剤と柔軟剤を入れてボタンを押す。そしてあたしは風呂に入つて汗を流すこととした。

（約20分後）

洗濯機の駆動音が止まり、脱衣所のドアから「コンコン」と音がしてアレンが声を掛けてきた。

イルミナ「洗濯機が止まつたから、脱衣所に入つても良いかい？ 乾燥機に入れたいんで・・・。」

アリサ「いいわよ。」

イルミナ「じゃあ入るぞ。」

ガチャと音がしてアレンが脱衣所に入る。そして洗濯機の蓋を開ける音の後にガサゴソ・・・バタンと音がして乾燥機が回りだす。そしてアレンが部屋から出て行つた。

（約10分後）

あたしは風呂を出て体を拭く。乾燥機はまだ回っていたので、アレンから先ほど手渡されたバスローブを身に着けて脱衣所を出てさつきのベッドのあつた部屋に向かつた。部屋に入るとアレンが「一

ヒーを飲みながら新聞に目を走らせていた。

イルミナ「出てきたか・・・長いな。」

アリサ「女の子なんだから仕方ないでしょー。これでも頑張つて・・・少しだけ急いだのよ。！」

イルミナ「は・・・はあ。それより何か飲むかい? ハーヒーか紅茶があるけど。」

アリサ「んじゃ紅茶で。」

イルミナ「はいはい、それじゃ今から用意するから少し待つていてくれよ。」

アリサ「うん。」

そして、アレンは腰掛けていた一人掛けのソファから身を起こして、新聞をテーブルの上に置いた。新聞が気になつたので少し覗いてみることにしたが・・・。

アリサ（はあ！？何これ・・・何て書いてあんの？全く読めない。英語でもフランス語でもスペイン語でもない。こんな字初めて見た。）

と、アレンが紅茶を淹れたポットとティーカップを持って来た。

イルミナ「その新聞を読めるのかい？」

アリサ「いや・・・全く読めない。」

イルミナ「そりゃ そうだろう。それはミッドチルダで使われている言語だからな。読めたら逆に驚くよ。・・・はい、紅茶。」

アリサ「あ・・・ありがと。アレンは読めるの？」

イルミナ「もちろん。なにせ俺はミッドチルダ出身だからな。というか読めなかつたら普通新聞とらないだろ。」

アリサ「う・・・それは置いといで。ミッドチルダつてもつと技術が発達したところだと思ってたけど・・・そうでもないのかなあ？」

イルミナ「はつはつはつ、これは個人的な趣味みたいなものだ。俺はあまり電子機器とかになれなくてな。それにこっちの方が読みやすいしな。」

アリサ「へえ・・・ねえねえ、あたしにミッドチルダ語教えてよ。」

「

イルミナ「？・・・学校の勉強とかいいのか？責任とれないぞ？」

アリサ「いいのよ。あたし学年トップだし、最近勉強つまんなくて・  
・だから教えてよ。」

イルミナ「分かつたよ、教えるよ。」

時間が過ぎるのは早く、気付けば夕方だった。

イルミナ「むつ・・・今日はここまでだ。他にやることがある。」

アリサ「？？？」

突然、アレンの顔つきが真剣なものになった。

イルミナ「真面目な質問だ。正直に答えてくれよ。君は・・・力が欲しいか？」

アリサ「ちか・・・ら？」

イルミナ「そうだ、力だ。愛する者や友を守るための力だ。」

アリサ「でも・・・すずかは・・・。」

そうだ。すずかは殺されてしまった。親友と呼べる存在に・・・。

イルミナ「大丈夫だ、彼女は生きている。実はあの時彼女にはまだ息があった。助けられなかつたのは残念だが、どうやら管理局に連れて行かれたようだ。」

アリサ「すずかが・・・生きている！？」

イルミナ「ああ、彼女を助けたくないか？そのための力が欲しくないか？」

アリサ「ほしい・・・力が欲しい・・・すずかを守るための力が・・・欲しつ！・・・でもあたしには魔法が使えない。」

イルミナ「大丈夫だ。君には力がある。魔法を使う力が君には眠っている。その封印を解きに行こう。さあ着替えて。」

あたしが着替え終わると、アレンはあたしの手を引いて隠れ家を出た。

## 第8話「決意」（後書き）

かなか、アリサのバリアジャケットが思いつきません。次話まで少し時間がかかる可能性があるので、そろんといじょにじくお願いします。

## 第9話「炎の契約」（前書き）

前話から一週間後の投稿となってしまいました。これからは3～5日ペースで投稿したいと思います。

## 第9話「炎の契約」

時間は戻る

『アリサ side』

あたしがアラストールに触れた。

アラストール「これで契約が済んだ。契約料として魔力を貰い請け  
るぞ。」

トクン・トクン・トクン・

あたしのリンクアコアから聞こえてくる鼓動が早くなる。それと  
同時に、リンクアコアから円と三角形の魔法陣が現れる。それは幾  
重にも重り、もはや球状になつて見える。

ピキ・・・パキン・・・パキパキ

ガラスに鱗がはいるように、魔法陣一つ一つに亀裂が走る。

パキパキ・・・ガシャン！

ガラスが砕け散る音と共に魔法陣が崩れ落ち、大量の魔力が溢れ  
リンカー・コアに炎が灯る。そして、その炎がアラストールに取り入  
れられる。

アラストール「契約料としてかなりの魔力を貰い受けたが、まだ半  
分以上残すとはな・・・先代では魔力が足りず自滅してしまったケー  
スがあつたが、こんなに魔力を残したのは初めてだ。」

アリサ「ちょっと疲れちゃつたけど、まだまだ動けるわ。肩慣らし  
に何かしたいんだけど。」

アラストール「ふむ・・・。そのまえに我を君の首に掛けてくれん  
か？」

アリサ「そうだつたわね。・・・よいしょ。それで？」

アラストール「うむ。それではまずバリアジャケットを決めてもら  
いたい。デザインを頭の中に浮かべれば、それで良い。」

アリサ「バリアジャケットね・・・まあこんな感じかしら。」

アラストール「承知した。」

あたしの体を炎が包み、服が消える。そして炎がバリアジャケッ  
トへと変わっていく。そのデザインはチャイナ服を思わせるような、  
赤い縁取りが施してある袖の無いワンピース。その上に膝下までの

長さがある黒のロングコートを袖を通さず】羽織っている。そしてアリサの背中からは炎の翼が生えており、その中に等間隔で真つ赤な菱形の宝石が五つずつの計10本が翼の羽を作るように炎の中に浮かんでいる。さらに髪からは火の粉がぱらぱらと舞い散っている。

アリサ「ちょっとーー」の黒のロングコートはイメージしてないんだ  
けどー?」「

アラストール「仕様だ。そこには何でも収容できる。」

アリサ「ふうん、ドラもんの四次元ポケットみたいなもんか・・・」

と、いいながら『贊殿遮那』を出し入れしてみる。バリアジャケットの感触を確かめていると、前方からクロノの声が聞こえてくる。

アリサ（あこつ・・・・・。）

アリサ「アラストール、肩慣らししたいんだけど。  
使い方教えてくれない?」

アラストール「うむ。・・・」れでどうだ?」

頭の中に直接情報が流れ込んでくる。魔法の名称、概要、用途が次々に頭に入していく。

アリサ「高速移動魔法は『フレイムフリューゲル』……よし、分かった。それじゃあ早速フレイムフリューゲル！」

あたしの体があつた場所に火の粉だけ残し、クロノの後ろに移動する。

クロノ「はっ！……あ……アリサ、こんな馬鹿なことはやめてくれ。」

クロノはあたしに気付き、振り向きたがった。

アリサ「馬鹿なこと？……なにそれ。それってあんた達のことじやないの？」

クロノ「君は何を言つて？」

アリサ「うるさい。……すずかの受けた痛み、あんた達にも受けさせてあげるっ！」

あたしは『贊殿遮那』をクロノに向かって振り抜く。クロノはすぐさまそれに反応し、デュランダルで『贊殿遮那』を受け止めた。

クロノ「くつ・・・。確かに僕達はすずかを守れなかつた。だが、すずかを傷つけたのは」

イルミナ「無駄話はそこまでだ。スナイプショット!」

アレンの援護射撃でクロノが一旦あたしから離れる。

アリサ「アレン!今魔法はあまり使わない方が・・・。」

イルミナ「分かつていろさー早くケリをつけってくれよー!」

アリサ「分かつた!・・・アラストール、攻撃魔法を片っ端からあたしの頭に流して!」

アラストール「承知した。」

クロノ「すずかを傷つけたのはその男だ!アリサ今すぐ戦闘行為をやめろ!」

と、言いつつクロノがアレンに指を指す。

アリサ「そんな分かりきった嘘を誰が信じるの?あたしは見たの、

あんたがすずかを氷の槍で突き刺すのを…」

クロノ「は…？ そんなことは…」

アリサ「ひるさこつるひるせ。あんたなんか消えちゃえぱい  
いのよーフレイムファングー！」

あたしの声と共に、炎の翼から8つの菱形の宝石が飛び出し、クロ  
ノの方へ向かつて飛んでいく。

クロノ「な…ななんだ…」これは…？」

菱形の宝石 フレイムファング は先端に魔力刃を展開し、クロ  
ノに襲い掛かる。すると…

バシュツ

クロノ「…？ …砲撃だと…でも、一体どこから…まさか、  
あの宝石か…？」

アリサ「よく気付いたわね。でも、それが分かつたとしても逃げら  
れない。そこ…」

クロノ「…？ …しつ、しまつた！」

クロノが複数の紅の魔力砲の熱戦に取り囮まれ、身動きが取れなくなる。あたしはその隙を突き、『贊殿遮那』をクロノに向かって突き立て前に飛ぶ。

アリサ「はあああああああああああああ！」

グサリ・・・ボタボタッ

炎を纏つた刃がクロノの下腹部を刺し貫く。その刃を伝つて赤色の生温かい液体がボタボタと地面に落ちる。

クロノ「がはつ！あ・・・アリサ・・・。」

アリサ「・・・消える。」

あたしはクロノの胸の前に手を翳す。

アリサ「・・・フレイムリヒト。」

翳した手から、紅の光線が瞬く。クロノの体は光に飲み込まれ、ビルの壁に光線と共に衝突し、砂煙が立ち込める。煙が晴れると、そこにはうつ伏せに倒れて動かなくなつたクロノの姿がある。

アリサ「呆氣ないわね。まあ、さっきのアレンの魔法で99%近い魔力が吸収されちゃったから仕方が無いとは思うけど。一応、非殺傷設定だつたけど大丈夫よね、死んでないわよね？」

本当の目的はすずかと同じ痛みを受けさせることだ。殺すことではない。そう結論に至つての対処だ。

アリサ（まあ、死んでも死んでも死んでもどっちでもいいけどね。・・でも、あたしはすずかを守るためにだけなら何でもする。そう心に誓つたから・・・誓つたからこの力を手にした・・・。）

心の中で、自分の決意を再確認する。それに搖るものが無いことを確認して辺りを見回す。

アリサ「次はどいつにしようかしら。」

地面に倒れ伏している元親友を見回す。そこでアレンから声がかかった。

イルミナ「アリサ、そろそろ結界が持ちそうに無い。この結界の外側は管理局の結界がある。転移先を探知されても厄介だ。引き上げるべ。」

アリサ「・・・分かつた。」

少し不満げにそう答えた。そしてアレンと一緒に、あたしの転移魔法で隠れ家に転移した。

## 第9話「炎の契約」（後書き）

作者「駄文ブンwww」

アリサ「全然面白くないわよ。」

作者「だろうな。とりあえずアリサ、俺と結婚してくれ。」

アリサ「死ね！」

作者「最高の褒め言葉だ！ もつと書かしてくれー。」

アリサ「・・・・・」

作者「無関心ってのは一番酷いんだよ（泣）」

アリサ「次回もお楽しみに！」

作者「じり～つ～勝手におわ（泣）

## 第10話「シユッソッターライ

《リングティ side》

魔導師部隊が派遣された直後にクロノ達との通信、念話が途絶えた。

リングティ「結界の解析を急いで！」

エイミィ「今やつてますーでも、今までに無い結界で割り込める隙  
がありません！」

通信が途絶えてから10分以上は経過している。それなのに、未だに結界の解析が終わらない。嫌な予感がアースラの艦内に漂う。

エイミィ「！？・・・結界が解かれます！」

リングティ「嫌な予感がするわ。結界消滅後、すぐにみんなと連絡を取つて！それと艦内への転送の準備も一応お願い！」

エイミィ「了解！・・・・結界内の映像出ますー！」

正面の巨大な画面に映像が映し出される。

リンディ「みんなとの通信は！？」

エイミィ「・・・駄目です。みんな応答しません。しかし、生体反応は検出されました。7人が固まつていて、もう1人が100mほど離れた場所です。それと魔導師部隊は既に収容が終わつたとの連絡が入りました。」

リンディ「そう・・・みんなを映像に出せる？」「..」

エイミィ「了解！・・・映像出ます！」

リンディ&エイミィ「はっ！？」

そこに映つっていたのは、地面に倒れたなのは達だった。そして何より衝撃的だつたのは、下腹部から血を流してビルの壁にもたれ掛かっているクロノの姿であつた。

リンディ「クロノ・・・ノ！？」

エイミィ「クロノ君ー！」

リンディ「早くー・・・早くみんなをアースラへー医療班は待機をー！」

そしてすぐさまクロノの元へ走つていった。

## 『アリサ side』

手にはまだ、クロノを刺した感触が残っている。その手を眺めながら握つたり開いたりを、さつきからずっと繰り返している。それに心配そうにアレンが声を掛けてくる。

イルミナ「・・・後悔しているのか？・・・刺したこと？」

あたしはその質問に首を横に振った。

アリサ「ううん。あたしは・・・あたしはすずかのためなら何でもする。そう決めたから・・・後悔はしない。」

イルミナ「・・・ホントにそうか？」

アリサ「例えそれが嘘だつたとしても、もう後戻りはできない。だから後悔はしない。」

イルミナ「お前、ちっこいのにすぐえ大人だよな。だが、確かにもう後戻りはできないな。俺もお前も・・・」

ペペペッ

「で何かの電子音が鳴った。するとアレンが腕のデバイスを操

作し始めた。

イルミナ「俺だ。…………今終わつたところだ。そひうの準備はどうなつてゐる？…………分かつた、明日そちらに行く。…………もちろんだ、アリサも連れて行く。人数は多いほうがいいだろ。…………ああ、じゃあ切るぞ。」

そう言って、またデバイスを操作する。多分誰かとの通信だらうが、一応訊いてみる。

アリサ「何してたの？」

イルミナ「仲間との通信だ。」

アリサ「なあま？」

イルミナ「ああ。俺は管理局の一部の人間の排除を目的とする組織『シコツツリッター』の構成員でありナンバー2だからな。」

アリサ「ナンバー2ってことは2番目に戦うってこと？」

イルミナ「ああ、そうだ。そして俺の任務は、君の保護と違法な封印の解除といったところだ。」

あたしに掛けられていた封印魔法は、どうやら違法なものだったらしい。確かに、本人に同意も得ずそんなことをするのは違法に決

まっている。しかし、あたしには次元世界間の法律などはよく分からないので、話の方向を変えることにした。

アリサ「へえ～、じゃあさつきの通信の内容は？」

イルミナ「俺の任務が成功したことの報告と、次の作戦の準備ができたかどうかの確認だ。」

アリサ「ふ～ん。ねえ、そういうえばさつきから気になつてたんだけど、まさかあたしもその『シユツソリッター』に入ってるの？なんかさつき連れて行くとか言ってたけど・・・」

一番の疑問点を单刀直入に訊いてみた。

イルミナ「一応建前上はメンバーに入っている。君が同意さえすれば、正式なメンバーになる。」

アリサ「もし、嫌だつていつたら？」

イルミナ「強引にでも入らせるわ。君をこのままにしておく訳にはいかないからな。」

管理局を敵に回すとものすごく面倒くさそうだ。だが、本当に断つたら、より面倒くさそうな状況になると思い、適当に返事をしておいた。

アリサ「じゃあ、入るわ。」

イルミナ「決まりだな。今からアリサ・バーングスは正式に『シユツツリッター』のナンバー3になった。おめでとう。」

アレンは、嬉しそうに握手を求めてきた。

アリサ「どういたしまして。あたし今日たくさん汗かいたからお風呂に入つてくる。」

それに対し、あたしは棒読みの返事をしてどうでもよろしく脱衣所へ向かった。

『イルミナ side』

アリサが脱衣所に向かっていった。特にすることも無いのでソファに座ることにした。

イルミナ「はあ・・・・、ランション下がるわ〜、あんなリアクションされたら。・・・・にして、今日は疲れた。」

気付けば、自分の意識は眠りに落ちていた・・・。

## 第一〇話「シコッシュコッター」（後書き）

昨日投稿しようつと思つていたら寝ついてしまつた。申し訳ない。

次回はイールミナの過去についてのお話にしたいと思つています。

## 第1-1話「過去」

『? ? ? ? s.i.d.e』

今、僕はとある執務官室へ向かっている。テロ組織対策本部の本部長のシルヴァ・ロムウーム大佐にクレームを言いに行くためだ。

「シンソン

？？？「失礼します。」

シルヴァ「む？誰だ・・・・なんだイルミナ、また君か・・・。」

大佐はため息をつき、いかにも嫌そうな顔をしている。

イルミナ「またとは何ですか、またとは！？・・・それより、来週決行されるあの作戦、何なんですかアレは！？」

シルヴァ「うるさいなあ、少しは落ち着けって・・・。」

イルミナ「これが落ち着いていられますか！？この作戦おかしくないですか！？相手はもしかしたら法律で禁止されている質量兵器を所有しているかもしねりないんですよ！？」

僕が言っている作戦というのは、最近動きが活発化した反管理局のテロ組織の一斉摘発のことだ。どうやらこの辺にアジトを隠しているらしい。

シルヴア「と言わても、この作戦内容を考案したのは俺じゃなくて評議会の人間なんだよ。」

イルミナ「そこを何とかするのがあなたの仕事じゃないんですか！？万が一失敗でもしたら、多くの民間人や管理局員が犠牲になるんですよ！？」

シルヴァ「ハア・・・最近のちびっ子はどうしてこんなのがぱっかりなんだあ？ハラオウンの息子さんもアレだしなあ・・・。」

イルミナ「ちょっと！？聞いてるんですけどー！」

シルヴァ「聞いてるよ。」

イルミナ「じゃあ、少しば

言いかけたところを大佐の言葉によつて遮られる。

シルヴァ「努力したさ。57回・・・俺が作戦変更の案を評議会に提出した回数だ。だが、その案は通ることは無かつた。なぜなら、書類に目も通さずに書類を処分しているからだ。」

イルミナ「そんな・・・。それなら提督や別の評議会委員にそ

「…」とを告発すれば「

シルヴァ「三提督に書類は行かない、その前に処分されるからだ…。  
・何度も試した。それに、別の評議会委員に告発文を提出した。だが、これも消された。」

イルミナ「そ…そなん。」

シルヴァ「ヤツら全員グルなんだ！この作戦も俺らみたいな邪魔者を管理局から消すためだ！対策副部長の中佐だつて、だいぶ前から評議会に目をつけられている！」

イルミナ「それなら、こちらで作戦変更を…。」

シルヴァ「それでは、命令違反で査問にかけられ全員のクビが飛ぶ。中止も同じだ…。テロ組織は質量兵器を所有している。これはつい最近の調査で分かつたことだ。俺達は死ぬか、クビかの一択しかないんだ。」

言葉も出なかつた。まさにその文字通りだ。ただ立ち死くしかなかつた。

それからどうすることも出来ず、ついに一週間が経つてしまった。作戦当日だ。僕達はテロ組織が使用していると思われる建物の周りで待機していた。大佐の命令待ちだ。

大佐から全員に通信が入つた。

シルヴァ「会議で話した通り、相手は質量兵器を所有している。私

が合図するのと同時に砲撃部隊は南側の壁を砲撃。その後、我々突撃部隊は北側から突入する。一人でも逃がすなよ！絶対にだ！そしてみんなで生きて帰ろ！」

シルヴィア大佐はテロ組織のアジトの中の様子を窺っている。しばらくしてから、大佐が合図を出した。

シルヴィア「突撃・・・開始！」

ドゴォン！

と、派手な爆発音と共に建物の南側の壁が崩れる。そして、一斉に局員が雪崩れ込みテロ組織のメンバーを捕らえていく。

局員A「大人しく降参するんだな。」

局員B「よし、こっちも捕まえたぞ！」

局員C「大佐ーここに質量兵器があります！」

シルヴィア「よくやった。これで全員捕まえたな。」

イルミナ「犠牲も出なかつたし、大成功ですね。」

ちなみに僕は、魔力変換資質の氷結で10人ほどの足と腕を拘束

した。

シルヴア「にしては、えらく呆氣無かつたな。不気味なくらいだ。」

イルミナ「いいじゃないですか、とりあえず成功したんだし。」

シルヴア「ううん。何か嫌な予感がする。」

大佐がそう言つた瞬間、局員が驚愕の声を上げた。

局員C「た・・・大佐！ 急にこの兵器が稼動しました！」

シルヴア「な・・・何！？ どこを触った！？」

局員C「誰も触れてはいません。ただ、突然に電源が入りカウントダウンが・・・。」

シルヴア「おい貴様ら！ これはどうなつてんだよ！？」

大佐は叫びながら、テロリストの襟に掴みかかった。

## 第11話「過去」（後書き）

1話分で終わらせるつもつだったんだけど……ま、いつか。

## 第1-2話「夢」

テロリスト「へへっ、俺らのアジトはここだけじゃねえ。こつから10km以上離れたところ支部があんだよ。」

シルヴァ「な・・・なんだとー?」

テロリスト「そして、この本部に異常があると、支部の独断で本部から半径3kmの範囲を焼け野原にする爆弾が起動するようになつてゐる。」

テロリストの男は、起動した爆弾を眺めながらそんなことを言った。ここから半径3kmといえば、僕の家族の家があるところだ。今の時間帯ではちょうど父と妹が家に帰つているからだ。僕はそのまま床に崩れ落ちた。

シルヴァ「仲間を殺すのか!?その支部のヤツらはー?」

テロリスト「俺らは元から覚悟してここにいる。」

シルヴァ 大佐と男が話す声が僅かに聞こえてくる。

そして周りのテロリスト達は目を伏せ俯き抵抗をぴたりと止めた。まるで死を覚悟した死刑囚のようだ。

シルヴァ「なんてふざけたことをするんだ。君達は。俺は殺さない

ぞ、君達と局員と一般人を絶対に守るー。」

テロリスト「お前みたいなヤツが管理局のトップなら、俺らもこんなことせずに済んだのになあ。そうだ、いいことを教えてやるつ。」

男はまた不敵に笑つて言葉を続けた。

テロリスト「管理局の高官達は、このアジト以外のアジトの場所を掴んでいる。お前達がそれ知らないってことは、そいつらに必要なって思われたんだな。そしてこのまま半径3kmが焼け野原になつても、管理局の高官共は俺らに支部があつたなんて知りませんでした、で済ます気のようだぜ?」

シルヴア「そんなことはさせない。今すぐここを脱出するだー。」

テロリスト「無理だな。ここから少しでも離れれば爆弾は爆発しちまうし、もう時間のようだぜ・・・。あばよ、全ての次元世界に真の平和を切に願う・・・」

そして目の前が光に包まれた。最後に見たのは物凄い形相で僕の方へ走ってきた大佐だった。

・・・・・  
気が付くと背中全身が火傷だらけの大佐が横たわっていた。辺り

を見回してみると殆ど何も無い。平らな地面が延々と続いている。

イルミナ「た・・・大佐、僕を庇つて・・・」んな・・・。

シルヴァ「は・・は、今までで最高の強度を誇るシールドを展開したのにこの様かよ・・・ぐつ。」

イルミナ「どうして、僕を庇つて……。」

シルヴァ「んなことは決まつてんじゃねえか。お前にはまだ未来がある。こんなシケたおつさんなんかよりもずっと価値がある存在だ。その時間を大切に使って、管理局を正しい方向へ・・・ゴホッゴホ

イルミナ「もう喋らないで下さい。傷が余計に広がります。今治癒魔法を・・・。」

シルヴア「もうもたねえ。視界がか・・・すんで・・きて、もう長くはない。未来は・・・お前に託した。」

そして大佐の体がゆっくりと弛緩した。

大声で泣き叫んだ。一番頼りにしていた大佐がここで命を散らしてしまった。

それから、しばらくして今自分の家があつた場所で復讐を誓つた。すると、後ろから足音が聞こえてきた。

イルミナ「だ・・・誰だ、お前は？」

男「俺は、お前と同じ志を持つ者だ。一緒に来るか？」

少し考えた。だが答えは既に決まっている。もちろん。

イルミナ「行く。」

目が覚めた。目の前ではアリサが心配そうに顔を覗き込んでいる。

イルミナ（夢か。にしても悪い夢だった。）

アリサ「すごい魔されてたけど大丈夫？悪い夢でも見た？」

イルミナ「ああ、悪い夢だった。うわ、すごい寝汗だ。」

アリサ「お風呂でも入ってくれば？」

イルミナ「そりゃせていただくよ。」

やして明日のことを考えながら風呂に向かった。

## 第1-2話「夢」（後書き）

なかなか、書くのが進まない  
一週間に一回は更新したいよう

## 第1-3話「安否」

『HIMI side』

あれからすぐに、本局へ向かい今は全員医務室に運ばれた後だつた。

リンディ「・・・私も一緒にていれば、みんなをこんな事には・  
・。」

ハイミ「だ・・・大丈夫だよ。きっとみんなすぐに田を見ますよ。  
・。」

うな垂れているリンディ提督を私が必死に慰める。こういつたやり取りを何回もしている内に医務室のドアが開き中から白衣を着た医者と看護師が出てきた。

リンディ「み・・・みんなは大丈夫なの!?クロノは!?

こんなにも取り乱した提督を見るのは初めてだ、と驚きながらも医者の言葉に耳を傾けた。

医者「クロノ執務官以外は、魔力の枯渇による一時的な疲労で、一

晩眠れば全員明日には回復し仕事に戻れるでしょう。クロノ執務官は魔力の枯渇に合わせ、その枯渇状態での限界を超えた魔力ダメージにより当分目は覚めないでしょう。腹部の刺し傷はそれほど酷くなくこのまま治癒魔法を掛け続ければ2・3日で傷は無くなるでしょう。」

リンディ「クロノは何時目が覚めるんですか?」

医者「それは私にも分からない。こんな患者は初めてだからなあ。魔導師ランクSSでも不可能なはずなんだが・・・化け物とでも戦っていたのか君達は?」

医者は呆れた様子で私達に尋ねる。

エイミィ「いいえ、実は第97管理外世界で事件が起こりました・・・それで・・・」

医者「はあ・・・またそこか、最近そこで大きな事件が多発しているな。PT事件といい闇の書事件といい、次はいつたい何事件だ?おっ・・・そう言えば、第97管理外世界で思い出した。あの〜なんて言ったつけ?」

リンディ「月村すずかの事でしょうか?」

医者「そうそう、その月村すずかなんだが、最近目を覚ましたんだ。まだ歩けるまでには回復していないが、1・2週すれば退院できるそうだ。さつき病院から連絡が入つてな、そう伝えてくれと言われた。」

リンディ「それはよかつた。今度みんなでお見舞いに行かなくちゃね。クロノも早く目を覚ましてくれればいいんだけど・・・それに、アリサちゃんも・・・。」

医者「それでは私はこれで失礼するよ。今日は魔力枯渇患者が多くて、書類やら何やらで忙しいんだ。」

リンディ&ハイミィ「あつがとひざわこました。」

お礼を言つと、医者はそれと去つて行った。

ハイミィ「みんな命に別状がなくて良かつたね。」

リンディ「ええ、よかつた・・・本当に。」

### 『アリサ side』

田へベッド上で目が覚めた。朝日が覚めたばかりの目を焼く。

コンコン、ガチャ

ドアが開き、アレンが部屋に入つて來た。

イルミナ「ねせよついでこます。アリサさん。」

アリサ「うん、おはよアレン。今日は・・・。」

イルミナ「ええ、昨日話した通りに、その前に朝食を摂りましょ。」

」

アリサ「なんか口調おかしくない?」

イルミナ「え・・・そんなにおかしかったか?」

アリサ「うん、なんか執事みたかった。正直気持ち悪いわ。」

イルミナ「しょぼーーん。ま、朝飯食べよつぜー。」

そう言われ、半ば強引に食卓へ連れられて来た。テーブルの上には田舎焼きなどといった日本の朝食でよく見られるものがずらりと並んでいた。

アリサ「うわあ・・・これ全部アレンが作ったの?」

イルミナ「まあな、二ホンの料理本を見て勉強したんだ。この俺にワショクで作れないものは無い!」

アリサ「へえ・・・どれ、モグモグ」

イルミナ「どうだ?」

アリサ「う・・・美味しい、美味すぎるわ。こんなのが食べるの初めて、この出汁巻き卵なんて絶品ねー。」

イルミナ「そりゃビッグ。」

どんどん箸が進む。気付けば皿の上が全て綺麗になっていた。

アリサ「はあ～、美味しかった。」

イルミナ「ああ、我ながら感激するほどの腕前だ。」

アリサ「ねえねえ、こんどは中華とかフランスとかイタリアの料理も作つてよー！」

イルミナ「う～む、チュウカにフランス、イタリアかあ。頑張つて勉強するよ。」

アリサ「ありがとっ。」

朝食を食べた後、顔を洗つたり、歯を磨いたり、髪を梳いたりといろいろ、出発の準備を整える。

一通り準備が終わると、アレンが声を掛けてきた。

イルミナ「準備は整つたか？」

アリサ「うん。」

イルミナ「なら行くか。起きろ、ヴィゾーヴール、仕事だ。」

( Yes , My Master . )

イルミナ「超距離転送！」

( Redirect ! )

足元に半径1mくらいの群青色の魔法陣が展開される。そして光と共に体がその場から消えた。

第1-3話「安否」（後書き）

次の投稿は3月になりそつだなあ

## 第14話「overeSSS」（前書き）

久しぶりの投稿になります。相変わらずの駄文ですが、温かい目で見てください。

## 第14話「overness」

『アリサ side』

転送先は深い森の中だった。足元は、膝の高さまである、見たことも無い草が生い茂っていた。

アリサ「アレン、ここはどう？」

イルミナ「ここか？ここは、第48管理世界だ。管理世界といつても、魔導生物ぐらいしか住んでいない。」

アリサ「ふーん。じゃあこんなところに何しに来たのよ、あたし達は？」

イルミナ「まあまあ、慌てるな。そろそろ来る時間だ。」

アレンがそう言ったとき、目の前に赤色の魔法陣が展開された。そしてそこから人が出てきた。年齢は大体20~30歳くらいで、身長は190cmくらいはある男だった。

？？？「既に到着していたようだな、ナンバー2。待たせてしまつたか？」

イルミナ「いや、今さつき着いたところだ。ナンバー1。こうよ

り、その呼び方はやめないか? ギルバート・ディモン・アークライト。」

ギル「すまないな、イルミナ。ほう、このお嬢さんがあの・・・。  
なかなか、かわいいじゃないか。」

イルミナ「やめてくださいよ。彼女怖がってますよ。それより、今  
日の作戦は?」

ギル「事前に伝えたことに変更は無しだ。頑張ってくれよ。じゃあ  
な。」

イルミナ「ああ、分かっててるさ。じゃあな。」

ギルバートと呼ばれた男は、赤い魔法陣を足元に展開させ、どこ  
かに飛んでしまった。

アリサ「それで、結局作戦つてなんなのよ?」

イルミナ「今日の作戦は、この先にある研究所兼特別収監所の破壊  
と、そこにある一人を救出することだ。」

アリサ「ちょっと待つて。さつき普通に魔法使つてたけど、大丈夫  
なの?」

イルミナ「なに、問題ないぞ。ここにはジャミング装置がばら  
撒いてある。転送魔法程度じゃあ相手のレーダーには引っかかる  
こと。」

アリサ「研究所で働いてる人たちは？もしかして殺せつていうの？」

イルミナ「その必要は無い。魔力ダメージでのノックダウン程度で十分だ。」

アレンはそう言つと、ポケットから一枚の写真を取り出してあたしに見るようにと促してきた。

イルミナ「この子を救出する」ことが第一目標だ。」

アリサ「へえ、年齢はだいたいあたしと同じくらいね。この子を檻から救出すればいいのね。あと、第一目標があるつてことは、第二もあるつてこと？」

イルミナ「察しがいいな。その通りだ、第二目標は研究施設の破壊だ。間違つても人は殺すなよ。」

アリサ「わかつたわ。それじゃあ行きましょ。」

イルミナ「ああ、そうだな。起きるヴィゾーヴール仕事だ。」

( Yes - Si ! )

アリサ「行くわよ。アラストールっ！」

アラストール「承知した。」

二人は己のバリアジャケットを纏い、研究所へと向かつた。

### 『リンディ side』

全員の命に別状が無いことがわかつてから10時間は経つた。その間、リンディとエイミーはずつとクロノ達が寝ている集中治療室の前で一睡もせずに座り込んでいた。

10時間の間に割と軽症で済んだ、なのは、フェイト、コーノが意識を取り戻し、今は別の病室で寝かせられている。

エイミー「そろそろアースラに戻りましょ？少しは寝ないと、身体に障ります。そんなに若くないんですから。」

リンディ「ええ・・・そうね。でもみんなが心配で・・・とても寝られそうに無いわ。」

「ハアと、ため息をついたとき、管理局内部でアラートが鳴り響いた。

「リンディ&エイミー「一体、何!?」

「局内放送『第48管理世界で所属不明の魔力反応！提督階級は直ちに司令部へ！繰り返す、第48管理世界で所属不明の魔力反応！提督は直ちに司令部へ！』」

エイミィ「今の聞きましたー!？」

リンディ「ええ、すぐに行きましょう!」

司令部に到着すると、リチャード少将が迎えてくれた。司令部には地上本部のトップの人間も来ているようだった。

リンディ「どうしたんです!/? 一体何が!/?」

リチャード「まあ、落ち着いたまえ。今は現状の把握が大切だ。」

少将に落ち着くように促され、深呼吸する。すると、管制官が叫び声をあげた。

管制官「魔力反応を2つ確認しました! 一つはAAクラス、もう一つは測定不能です!」

リチャード「測定不能? 反応が小さ過ぎるのか!?

管制官「いえ・・・分かりませんが、もう少し待ってください・・・でました!」

リチャード「どうなんだ?」

管制官「・・・おこ・・・嘘だろ!?

リチャード「どうしたんだ？」

管制官「いえ・・・何でも、もう一度やってみます。  
・ば・・・馬鹿な！こんなのがあり得ない！」

リチャード「どうしたと言つんだー？」

管制官「魔力量が大きすぎて、測定できません。」

管制官「ランクオーバー SSS クラスです。」

絶望に満ちた声が司令部に響き渡った。

## 第14話「overeans」（後書き）

ここからまつも通りのマイペースで投稿していくことにします。  
作者には、読んでくれる方のお分かりの通りネーミングセンスが皆  
無です。許してください。

第1-5話「第48管理世界」（前書き）

いやー、今日の地震はすげかつた。揺れに揺れた！  
テンションあがつたわー www。

## 第1-5話「第48管理世界」

『リングディ side』

リングディ「オーバーSSSですって……!？」

リチャード「あ……ありえん。今までの記録ではUが最高だったはず……。それを軽く超える魔力量の魔導師を……いや、まだ敵と決まつた訳じやない。管制官、その周辺の状況はどうなつている?」

管制官「膨大な熱量で覆われています。爆発か、何かでしょうか?ですが、第48管理世界には人間は住んでおらず、魔導生物くらいしか居ません。その魔導生物の希少価値も全く無く、探査地域周辺に火山も無いはずです。」

リチャード「むう、確かに……言われてみれば第48管理世界には建造物も無かつたはず……と言つより、管理局の環境保護隊くらいしか入れないはずだが……。」

リングディ「とりあえず、近くの次元航行船にでも連絡を入れて調査しないと……。」

リチャード「いや、無理だな。あそこに入るには議会の認証がいる。そう易々とはいかないだろう。」

リングディ「何故認証がいるんです!? あそこはただの自然保護区域ですよ、おかしいじゃない!?」

リチャード「わ…私に言われても困るのだが…。」

リンティ「私、行つて来ます。行くわよ、ハイハイ。」

ハイハイ「は、はあ。」

リチャード「ま…待ちたまえ！」

リチャード少将の言葉を無視して、リンティとハイハイは司令部から退出した。

リチャード「これは、面倒くさい事になつた…ハア。」

司令部にはリチャード少将のため息だけが響きわたった。

『アリササイド』

研究員A「う・・・うわああああ。」・・殺さないでくれーー。」

ズドン

研究員A「うー」

研究員B「や……やめてくれー俺達が一体何を」

ズシャ

研究員B「ぐつ……」

アリサ「……。」

イルミナ「どうかしたか、アリサ？」

アリサ「……。」

イルミナ「別に殺してる訳じゃないんだ。そう思い詰める」とは無  
いぞ。」

アリサ「……でも、傷つけちゃった。関係の無い人達を……。」

イルミナ「そんな事無こさ。こいつ等はやられて当然の事をやつて  
きているからな。……着いたぞ。」

アレンがそう言って、目の前を見据える。それに習って、アリサ  
も前方を見たがそこにあるのはただの壁だった。

アリサ「何これ、ただの壁じゃない。檻なんてビックリも無いわよ。」

イルミナ「まあまあ、ここをいつせつして……と、開くわ。」

「ガーリガーリ」と、いかにもな音を立てて壁だと想っていた扉が左右に開いた。そしてその中には鉄格子がはりめぐらかされた部屋があった。そこには、アリサと同じくらいの身長の人影があった。

「？？？」「だ・・・誰？またボクを実験に使つの？もつ実験は終わつたって言つてたのに……。」

イルミナ「いや……、そういう訳じゃない。俺達は貴女を助けに来ただけだ。」

「？？？」「ボクを・・・助けに？」

イルミナ「ああ、君を助けに来た。」

「？？？」「あなた達は、誰なの？」

イルミナ「俺はイルミナ・アレイズ。気軽にアレンとも呼んでくれ。で、こいつが俺の相棒のヴィゾーヴニルだ。」

(Nice to meet you.)

「？？？」「じちじちはじめまして、貴女は？」

アリサ「あたしはアリサ・バーニングス、よろしく。んでこっちが」

アラストール「うむ、アラストールだ。よろしく頼むぞ。」

？？？「うそ、よひしべ。」

セレーヌで、アレンが訝しげに女子に話しかける。

イルミナ「俺等を信用するのか？何をするか分からないし、お前を殺すかもしれないのに。」

その言葉を聞き、女子はうつむき、首を横に振つて答えた。

女子「あなた達から邪な思惑は感じられないし、それにボクを殺すつもりなら有無を言わずに既に殺しておはづです。」

イルミナ「そうだな。・・・・君、名前は？」

女子「あっ、忘れていましたね。ボクの名前はシーナ・クジヨウ ようじくね。」

イルミナ「ああ、それでだシーナ、俺達の仲間にならないか？」

シーナ「なかま？」

イルミナ「ああ、一緒に管理局の闇を倒すために。シーナをこんな目に遭わせたやつらを倒すために、協力してくれるか？」

シーナ「うーん、・・・・分かったよ。ボクもボクをこんな目に

遭わせたヤツを許せないし。」

イルミナ「決まつたな、これで君はシユツシリッターのナンバー4だ。」

アリサは黙つてその一部始終を見ていた。心の中にほんの少しだけ迷いを持ちながら。

『side out』

アリサ達が研究所兼特別収監所から引き上げた後、ミッドチルダ内である声明が発表された。

ギル『はじめまして、いや久しぶりになるのかな管理局とミッドチルダの諸君。我々はシユツシリッターである。そして私はそのリーダー、ギルバート・ディモン・アークライトだ。我々は管理局の一部の人間が行つた悪事の被害者である。そこで我々はその愚かな人間共に制裁を与えると思う。だが、安心したまえこの件に無関係な者の命を取つたりはしないし、一般人に危害を加えるつもりは無い。あくまで管理局内で悪事を働く愚かな人間に制裁を与える。ミッドチルダの市民には管理局はそんなことをする筈が無いと思う者もいるとは思うが、これを見たまえ。ここは第48管理世界だ。書類上ここには人工の建造物は無く環境保護地域に指定されているがどういうことか研究所が建てられているではないか。それに、ここは管理局の管轄下であり違法な実験が繰り返されたというデータが残っている。我々はこの腐った部分の管理局を倒すため立ち上がつ

た！全ての次元世界に真の平和を！』

## 第1-5話「第48管理世界」（後書き）

やつベーアリサ全然喋っていないし、なのはとかフロイトとか空氣じ  
やん。やべえじやん。じやんじやんじやん。

新キャラ一人追加でーす。ボクつ娘つてすばらしこよね。

## 第16話「星黎殿」

リンディ sid e》

アースラに乗艦し、艦橋に入ったところで、映像が流れてきた。

ギル『はじめてまして、いや久しぶりになるのかな管理局とミッドチルダの諸君。我々はシユツツリッターである。そして私はそのリーダー、ギルバート・ディモン・アークライトだ。我々は管理局の真の平和を!』

それを見ていた一同は言葉を失い、だただた突っ立っていた。その静寂を破ったのはリンディだった。

リンディ「シユツツリッター……ですって!?

少し間を置いてエイミィが訊ねた。

エイミィ「なにか知っているんですか?」

リンディ「ええ、今から3年前、新暦63年に起つた、ミッド郊外の大規模テロは覚えてる?」

エイミィ「はい、確かに多くの一般人と管理局員が犠牲になったあの事件ですか？でも、テロリストのリーダーは既に捕まっていて、組織も崩壊、その後管理局総出で残りのテロリストも全員捕まえたんですね？テロリスト全員は終身刑だったはずでしたけど……。」

リンディ「そのことなんだけど、そのテロ組織がどうやら裏でシユツツリッターと繋がっていたらしいのよ。管理局も完全な証拠を見つけられず、結局野放しになっていたんだけどね。まさか今現れるなんて……。」

そこで管制官が通信が来ていると叫びついでござりました。

リチャード『今を見たかね！？シユツツリッターが我々管理局に宣戦布告してきおつた！』

リンディ「ま・・まあまあ、落ち着いて！」

リチャード『これのどこが落ち着いていられるか！？上層部にもさつきの事が本当かどうかも聞いたださねばならん！今すぐ司令部に来てくれ！』

一方的に通信してきて、一方的に切られてしまった。

リンディ「ハア……。じょうがないわね。もう一度司令部に行きましょ。』

せうすつじ、むづ一度司令部に向かつた。

## 『なのは いじめ』

皿を覚ますと皿の前は白い壁だつた。正確に言つて壁ではなく天井だ。

なのは「いじめ？」

周りを見回すとそこにはフロイドちゃんとゴーノ君が眠つているのが見えた。

なのは「フロイドちゃん…それにゴーノ君…」

すると、部屋のドアが開きそこから看護師が入ってきて、私を見るなり慌ててどこかへと走り去つていった。

なのは（看護師さんがいるつて事は、ここは病院！？でもなんで…・・・・あっ！）そうだった、私達アリサちゃんに…アリサちゃん怒つてた。でも何で？とにかく〇 H A N A S H I してみないと。）

「しばらぐ神殿」と耽つていると、フュイトちゃんが皿を覚ましたようだった。

「ふ・・フュイトちゃん…」

「フュイト…な…なのは…」

フュイトが皿を覚ましてしばらぐから、医師と思われる人と看護師がやって来ていること事情を聞かれた。だが、アリサのことはなにもフュイトも喋らなかつた。

### 『アリサ side』

今アリサ達は神殿のような場所にいる。よつなとは、それはただの神殿ではなく次元空間に漂う神殿だからである。その神殿の名は『星黎殿』、アリサの持つ宝具の一つだ。神殿の奥には玉座があり、そこにはギルバート・ディモン・アークライトが鎮座している。アリサ達はその玉座を少し見上げるような感じで立つてゐる。立つ影は全部で6人いる。そのうちの一人が喋りだした。

「…」「言ひちやつたね～。あらへ～。俺はどうなつても知らんぜ」

「」

やつ言つたのは、ライオット・アルビオといつ男だ。

?・?・? 「少しば言葉を慎め、ナンバー6。ギル様の前だぞ。」

ライオット「へーへー、分かりやしたよ。何だよ、俺より一個番号が上つてだけで威張り散らしやがつて。」

?・?・? 「なんかいたか？」

ライオット「なんでもねーよ。サーシャさんよお。」

カーシャと呼ばれた女の名は、サーシャ・ヴァリアーノ。

?・?・? 「ふつ、一人とも喧嘩はよくないですつ！ふんすかふんふん。仲直りを！」

ライオット「うひせーな、ガキが！」

?・?・? 「ガジーンーが・・ガキじゃないですか！わたしにはちゃんとミーアって名前があるんですよ。」

ミーアと言つてこる少女の名は、ミーア・アルラウネ。  
ライオットはミーアの反応を見て腹を抱えて笑つている。

ライオット「かつつか。にしても、マジでガキばっかだな。」

人中3人だぜ）、大丈夫なんかよ？ギルさんよ。」

ギル「ふつ、戦闘経験はお前達より少ないうそここに秘めている力は量りしれん。侮らない方がいいぞ、特にその一人はな。」

ライオット「この俺がガキより身分がひけーのは気にくわねえが、あんたがそういうなら大丈夫なんだろうな。」

サー・シャ「お前はさつきから誰と話しているんだ。もう少しは言葉遣いをだな。」

ライオット「わーってるよ。」

そう言ひついで、ライオットはあたし達のほうへ向き直った。

ライオット「確かアリサ・バニングスとかいつたな。テメーがナンバー3か、まあよろしくな。仲良くやってこーぜ。」

アリサ「こ・・じからいN。」

ライオット「んな堅くなるなよ。もっと楽に接してくれ。そこのシーナさんもよろしくな。」

シーナ「う・・うん。」

ライオット（確かに・・・ギルさんの言ひ事だけはあるな。この一人から感じる重圧<sup>ブレッシャー</sup>は相当のもんだ。・・・特にこのアリサ・バーニングスは別格だ。本能が騒ぐ、こいつはやべえってな・・・。まあ、気には病むこたあねえな。こいつ等は味方なんだ、管理局の悪魔共は俺達が残らず潰してやる。）

俺は心中で管理局に対する復讐の風を巻き起こしていた。

第1-6話「星黎殿」（後書き）

オリキヤラ追加でーす。

キャラ・追加オリキャラ設定（前書き）

2011-3/28 一部改変

## キャラ・追加オリキャラ設定

キャラ設定

アリサ・バーニングス

古代ベルカ式

魔力量クラス : o v e r S S S

魔導師ランク :

変換資質 : 炎

希少技能 : 宝具使用、自在法

使用デバイス : アラストール(ペンドント)

バリアジャケット 詳細 : 緑色に縁取った白のチャイナ風ワンピース  
に、膝下までの長さの黒い薄手のコート『夜笠』<sup>よがさ</sup>を羽織った感じ。  
背中からは常に炎の羽が生えており、その中に菱形の石が等間隔に  
浮いている。イメージで言うと、シャナの紅蓮の双翼とフランドー  
ル・スカーレットの羽を足した感じ。

追加オリキャラ設定・オリキャラ設定

イルミナ・アレイズ

魔導師ランク : S -

魔力量クラス : A A

変換資質 : 氷結

使用デバイス：ヴィゾーヴニル（薙刀）

バリアジャケット詳細：黒の長袖、長ズボンに白のコート。

ギルバート・ディモン・アークライト

### ミッド式

魔力量クラス：A

魔導師ランク：S

変換資質：

使用デバイス：コスマクロア（籠手）

詳細：数年前に評議会の手によって理由も無く管理局を追放されてしまい、その後は凶悪犯罪者として管理局員に命を狙われていた。バリアジャケット詳細：西洋風の黒い鎧【鎧と言ってもそこまでゴツくない】に白のマント。

サーチャ・ヴァリアーノ

### ミッド式

魔力量クラス：A

魔導師ランク：

変換資質：

使用デバイス：アイスフォーゲル（スナイパーライフル、ハンドガン×4）

詳細：父と母は管理局員だった。二人とも評議会の存在に異議を申し立てていたが、それを邪魔に思つた評議会によって殺されてしまった。評議会は一人の娘のサーチャも危険分子と判断し消そうとし

たが、管理局員のときのギルバー<sup>ト</sup>によつてそれを免れている。  
バリアジャケット詳細：紺色のつなぎ（作業着の）を腰まで着て、  
上半身は白のTシャツ一枚。

## シーナ・クジョウ

### 近代ベルカ式

魔力量クラス：S

魔導師ランク：

変換資質：氷結

使用デバイス：アラハバキ（長さ2m、幅40cmの大剣）

詳細：管理局の暗部により、どこかの世界から連れて来られた。そのときに両親を目の前で殺されており、研究所に連れられた後は投薬などの実験の日々を過ごしてきた。

バリアジャケット詳細：スバル・ナカジマの上着・ハチマキが無い感じ。かなり薄着w。

## ミーア・アルラウネ

### ミッド式

魔力量クラス：B+

魔導師ランク：

変換資質：

使用デバイス：クオーツ（カチューシャ）

詳細：魔法は補助しか使用できないが、召喚術を使用できる。しかし、その力と彼女の性格故に、昔から差別を受けてきた。両親にも

捨てられ、一人で歩いていたところをライオットに拾われた。  
バリアジャケット詳細：白のワンピースの上に、ピンクのカーディ  
ガン。さらに白のフード着きマント。

ライオット・アルビオ

近代ベルカ式

魔力量クラス：A A +

魔導師ランク：A +

変換資質：雷、水

使用デバイス：メリヒム（大太刀、小太刀の計2本）

詳細：イルミナと同じく、爆発に巻き込まれた。その時は別の犯罪者を追っていたが、その犯罪者も管理局の差し金であることに気付き、自分を殺そうとした管理局の悪を滅ぼすためにシュツツリッターに入つた。

バリアジャケット詳細：ジーンズにタンクトップ。その上に革ジャ  
ン。

第17話「月村すずか」（前書き）

連続で投稿しちゃつたよ・・・大丈夫かなあ・・・俺。

## 第17話「月村すずか」

『なのは side』

自分が目を覚ましてから数日。あの放送があつてからショッシリッターの破壊活動は休むことなく続いていた。その間にはやても目を覚まし、ヴォルケンリッターも十分に動ける状態だった。だが、クロノは未だに目を覚ますことなく、病院の一室にいる。

そして、なのははと言つて、今はもう退院してフェイトと一緒にデバイスの状況を確かめに管理局本部第四技術部のマリーさんの所に訪れていた。

なのは「レイジングハート大丈夫かなあ？」

フェイト「バルディッシュもかなり傷ついたし……。」

心配そうに咳きながら、技術部のドアをたたくと、マリーさんが出迎えてくれた。

なのは「レイジングハートの様子はどうなんですか?」

フェイト「あのう・・バルディッシュも・・・。」

そんな心配をよそに、マリーさんは大丈夫といった雰囲気で話す。

「マリー、特に問題は無いよ。少し損傷が多い様に見えるけどシステム、その他諸々には異常は無い。今からでも普通に使えるよ。」

なのは「あ・・ありがとうございます!」

マリー「いえいえ、私は特に何もしていませんよ。それじゃあ今からレイジングハートとバルディッシュを渡すからちょっと待つてね。」

さう言って、奥の部屋に入つていった。しばらくして、あせあせとマリーさんが小走り気味にやってきた。

マリー「はい、レイジングハートとバルディッシュよ。何があつたのかは深くは聞かないけど大事にするのよ。」

なのは&フロイト「はい!」

そして、技術部を後にした。

次に訪れたのはリングディ提督のこと。既にユーノ君が来ていて、提督と一緒に出迎えてくれた。部屋のなかにはレティ・ロウラン提督、ヴォルケンリッターの人達もいた。

リングディ「や、座つて座つて。あなた達に話があるの。」

なのは「話ですか……？」

フロイト「シグナムさん達はもつ？」

シグナム「いや、我々もまだ話は聞いていない。まあ、予想はできるがな。」

ヴィータ「…………。」

リンディ「そうね。多分シグナムさんの思つてこむことは正解だわ。やがてアリサちゃんのことにつっこめてよ。」

リンディ提督がそう言つた瞬間、部屋の空気は重くなつた。

なのは「アリサちゃん…………。」

リンディ「私の調べで分かつたことを話すわ。まず一つ目、今アリサちゃんはシユツツリッターに入つてゐること。「一つ目、アリサちゃんはシユツツリッターの幹部である可能性があること。二つ目、アリサちゃんの私達ではアリサちゃんを止められること」とこと。そして四つ目、今の彼女は利用されているのではなく自分の意思で戦つていると言つこと。これくらいかしぃ。」

ゴーノ「や、そんな・・・幾らなんでも、アリサさんがそんなことをする人では――」

レティ「人つてこうのはね、きっかけがあれば変わってしまうもの

なのよ。あなた達なら良く分かっているはずだわ。ヴォルケンリッターの方々は特に。」

シグナム「確かに、我々は今の主であるはやてのおかげで変わった。だが、今のアリサにはそんなきっかけが見当たらない。」

リンディ「いいえ、あるはずよ。アリサちゃんが攫われたあの日のことをよく思い出して」「うんなど。」

フェイド「……すずか。」

リンディ「そうよ。彼女にとつてすずかちゃんが傷つく、ましてや死ぬ寸前の姿を晒されれば、ああなってしまう。アリサちゃんにとってすずかちゃんはそれだけ大きな存在なのかも知れないわね。」

ザフィーラ「しかし、何故彼女はすずかを傷つけた張本人であるイルミナとこう男に着いているのだ?」

リンディ「おそらく、幻術の類ね。たぐい未だに幻術には謎が多いけど、そここらへんが一番怪しいわね。」

シャマル「確かに、今はまだ幻術を使える魔導師は少ないですから・対処法もないですし。」

ヴィータ「ちくしょーー！卑怯な手を使いやがつて！」

怒りを抑えきれず今すぐにでもシュツツリッターに殴りこみに行きかねない状態のヴィータを静止させシグナムがリンディに問いかけた。

シグナム「・・・提督、我々に他に何か~~いひ~~ことがあつてここに呼んだのではないですか？」

リンディイ「察しが良くて助かるわ。」

シグナム「レティ提督がこの場にいることを考慮してのただの推測です。」

な、フ、ユ、ヴ「? ? ?」

シグナムとリンディイ提督の一人だけで話が進む中、取り残されたのは、フロイト、ユーノ、ヴィータが頭の上に?を三つ浮かべていた。

なのは「あのう、何のこと話をしているのか分からんんですけど・・・。」

なのはの言葉にて、他の三人もうんうんと頷く。

リンディイ「ああ、『めんなさいね、話が逸れてしまつていたわ。あなた達をここに呼んだのはお願いがあるからなのよ。』」

ユーノ「お願い・・・ですか？」

リンディ「そう、アリサちゃんについてのお願い。レティ提督にはその協力をしてもらつたのよ。」

フェイト「協力?」

レティ「そう、私は主に人事などを取り仕切る立場の人間だからリンドィに頼まれて急遽きゅうきょ、対シユツツリッターの部隊を作つたのよ。苦労したわ。」

リンディ「苦労をかけたわね。・・・それで、お願ひって言つのは、その部隊に入隊して欲しいのよ。どうかしら?」

なのは「・・・・・」

フェイト「・・・・・」

ユーノ「・・・・・」

長い沈黙のなか、一人静寂を破つた者がいた。

ヴィータ「あたしは入る!」

なのは「ヴィータちゃん・・・。」

ヴィータ「あたしは、はやてやその友達を傷つけた連中が許せない。だから入る!」

次に動いたのはシグナムだった。

シグナム「フツ・・なら、私も入るわ。」

フェイド「シグナム・・・。」

シグナム「テスター、お前はアリサを取り戻さなくていいのか  
？大事な友達なんだろ？？」

フェイド「！・・私も入ります！」

ザフィーラは最初から決意が固まっていたらしくすんなりと入隊  
し、シャマルも「みんなが心配だから」と、言って入隊を認めた。  
残るのは、なのはとユーノ。

なのは「どうしよう？ユーノ君。」

ユーノ「それは、ほのはが決める」とだよ。君はアリサンを助け  
たくないの？」

なのは「助けたいよ！でも・・・。」

ユーノ「大丈夫だよ。アリサンも話せばきっと分かってくれる。  
心配することは無いと思つよ。」

なのは「わかつた。私も入隊する！」

リンティ「これで決まりね。」

なのは「あれ、ユーノくんは？」

なのはがみんなの疑問を突いた。

ユーノ「あはは、実はみんなが来る前にこの話を聞いてたのとき  
に・・・。」

なのは「ええーー。」

なのはの驚いた声が部屋中に響き渡った。

第17話「月村すずか」（後書き）

連続投稿というかなんというか、あと3話分ストックがあるんだけ  
どね・・・ハハ。

## 第1-8話「シーナ・クジョウ」（前書き）

まさかの3日連続投稿！

まあ、ストックが3話分になるように調整してるのでなんの問題もありませんがwww

まあそこには置いてここでアリサさんビギー

アリサ「魔法少女リリカルなのは～FlameS～、始まります」

## 第1-8話「シーナ・クジラウ」

『なのは Side』

なのは「ユーノくん、さるーい。」

フロイト「ホントだよ。」

ユーノ「あはは、「メン。」

リンクティ「はい、お話をされままで。今から任務の詳しい内容を伝えるからアリサちゃんと聞いてね。」

と聞いて、リンクティ提督がスクリーンに管理世界のひとつを表示した。

リンクティ「ここは第67管理世界よ。本当にここには何も無いはずなんだけど、どうやらここにも管理局の施設があるらしいのよ。」

シグナム「待ち伏せ……か。」

リンクティ「やつらの事。」ここで待つていれば必ずアリサちゃんは来るわ。そこで私達の任務はアリサちゃんの保護と他のシュッシュリッターの逮捕、保護よ。」

ヴィータ「簡単じゃねえか。とりあえずそのシュッシュなんとかをぶ

つ潰せばいいんだろ。」

リンディイ「えうね。それじゃあみんな準備して頂戴。準備ができ次第、出航するわ。」

みんな「了解!」

リンディイ「それじゃあ解散!」

リンディイ提督の一言で、全員が動き出した。

『アリサ side』

ライオット「ふいー。疲れた疲れた。」

サー・シャ「今日お前はほとんど何もしないだろ。」

ライオット「うひせー、うひせー。毎日こんなで疲れが溜まつてんだよ。なあ、アリサ。」

アリサ「そうね。疲れた。」

ライオット「ほーり、アリサも疲れてるじょんかよー。」

ミーア「違います!アリサさんは貴方と違つてたくさん働いてるから疲れているんですよ。」

ライオット「チツ、シーナお前は疲れてるよな?」

シーナ「い、いえ、ボクはそれほど疲れてないです。」

ライオット「イルミナあー。」

イルミナ「俺も疲れてなどいない。お前はサボり疲れたんじゃないのか?」

ライオット「うぐつ、さ・・サボってなんかいねーし。」

こんな雑談をしながら、6人でアークライトの元へ向かっている。  
無論、次の任務の内容を書きに行くためだ。

イルミナ「おい、今戻つたぞ。」

ギル「おお、お疲れ。次の任務は二日後だ。隊員の皆も疲れている  
だろうし、君らも疲れているだろ。少し休め。」

ライオット「ヒヤッホー！」

サーチャ「ギル様がそう言つたのなり・・・。」

ギル「皆、自室に戻つていじぞ。」

と、言われたのでとりあえず自室に戻ることにした。

アリサ「ハァー、疲れたわね。特にすることも無いじ寝よつかな。」

寝よつと思つた矢先、ドアをたたく音が聞こえたので出てみる」とした。

アリサ「だれ?」

シーナ「シーナです。少しいいかな?」

部屋に入ることを了承し、ソファに腰掛けるよづに促した。

アリサ「なにか用?」

紅茶を淹れながら用件を訊いた。

シーナ「ええっと・・あの・・その、ボクの事について話しておこうと思つて・・・。貴女のことについてても話してくれない?」

アリサ「・・・・・。」

シーナ「嫌なのは分かつていますけど、貴女の方が知りたくて・・・。いつも独りで居て寂しそうだと思つて・・、その・・・。」

アリサ「・・・わかった。」

シーナには全て話した。親友と呼べる友達がいたこと、その親友の一人が親友の手によつて傷つけられたこと。自分は傷つけられた親友を守る力が欲しかつたこと。その力で親友を傷つけてしまつたこと。

アリサ「だからもう、後戻りはできないの。あたしは元々その覚悟でここまで来たんだから。」

シーナ「辛い事があつたんだね。」

アリサ「うん、シーナは？」

シーナ「うん、ボクはね。もしかしたら、アリサと同じところに住んでいたのかも知れない。今から1年半くらい前にね、家に変な人たちが押し入つてきてね。そのときに目の前で父さんと母さんを殺されちゃつたんだ。それからどこかへ連れて行かれて毎日実験だの投薬だので大忙し。正直苦しかつた。逃げようとするとき電流が走る装置が首につけられてね、それで何度も気を失つた。連れて来られて半年がたつたら実権は終わりだ、とか言わされてあの檻に閉じ込められたつて感じかな。」

アリサ「・・・大変だつたんだね。あたし以上に・・・。」

シーナ「そんな事無いよ。今は幸せだもん。」

アリサ「なんで？」

シーナ「ライオットやサーチャ、ミーアみたいに面白い人達がいて、こうやって過去を語れる人もできた。だから幸せ。ボクはこの幸せをずっと守りたい。」

アリサ「・・・そう。」

シーナ「アリサは今幸せ?」

アリサ「分からないわ。」

本当に分からなかつた。今が幸せなのかどうなのか。

## 第1-8話「シーナ・クジョウ」（後書き）

そろそろ、戦闘に入ります。長く続きそうですね。  
先日久しぶりにアクセス見たらPV20,000越えてました。驚  
きです。

読んでくれる方々、ありがとうございます。

## 第19話「激突」

『アリサ side』

二日経つた。星黎殿の大広間にあたし達はギルが今回の標的を伝えるところとして集められた。

ライオット「今日はビックなんだ?」

ギル「焦るな。今伝える。今回、行つてもうのは第67管理世界だ。ここでも管理局の違法な実験が行われているらしい。君達にはこの施設の破壊だ。」

ライオット「破壊だけかよ、つまんねーなー」

サーチャ「少しばかりを慎んだらどうだ?」

ミーア「と・・・とりあえず行きましょうよ。」

シーナ「ほら、行こ? アリサ」

アリサ「うん、行こ」

イルミナ「転送魔法を開けるぞ、枠内に入らないと取り残されるぞ」

足元の円が輝きだし、視界が光に包まれる。視界が元に戻るとそこは竹林のような場所だった。

イルミナ「着いたぞ」

ライオット「やつと着いたか、つてもほんの一瞬だがな・・・ほう、こいつは面白くなりそうだ。強そうな獲物が4〜5人いんじゃねえか」

イルミナ「ライオット、俺、アリサ、シーナは突っ込むぞ。サーシャ、ミーアは後方支援だ！」

サ、ミー「ア解（ですつ）！」

イルミナ「作戦開始！」

ライオット「突っ込むぜー！」

そしてあたし達は竹林を抜けた。

『なのは side』

第67管理世界に着いてから2日が経つたが未だに何も変化はない。今は全員アースラで待機中だ。管理局を出てから3日間シユツツリッターは全く動いていなかった。

なのは「はあ～、アリサちゃん・・・」

と、唐突に艦内に警告音が鳴り響いた。

なのは「な・・・何なのー?」

『地上に転移魔法』を反応<sup>2つ</sup>おもいへシユッソリッターです。皆さん、すぐに転送ポートへー!』

転送ポートに急いでいくと、既にフロイトちゃん、ゴーノ君、ヴィータちゃん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーリさん、アルフさんがいた。ってアルフさん!?

なのは「アルフさん、なんでここに?..」

アルフ「そりゃあフェイトが心配だからだよ。あんたもね

なのは「こはははは」

『みんな揃つたね!~じゃあ転送するよー!』

転送先は、研究所みたいなところの上空だった。

## 『ライオット side』

竹林を抜けると、研究所が見えた、が俺はそんなもんに興味はねえ。研究所の上にいるやつらから物凄い力を感じる……いいだろう、俺のメリヒムの鎧にしてやるぜ！

ライオット「つむりや——————」

俺は高速でやつらに切りかかる。だが、反応がいいやつがいた。ピンクの髪を持つ女だ。

ライオット「へへへ、いい腕もつてんじゃねえか・・・だが、まだ甘いな」

俺は右手に持つ小太刀で切りかかる。しかし、ピンクの女はそれを軽々しく避ける。

ライオット「ちつ、勘がいいようだな」

シグナム「伊達に長くは生きていないのでな。貴様の剣ぐらい易々と見切れる」

「」で金髪の女が間に入つて來た。

フェイト「武装を解除して、今すぐ投降を！今ならまだ弁護の余地があります！」

弁護の余地？んなもんいらねえ、俺は戦いたいだけだ、この強そうなやつらと・・・そして漬す、管理局を。

ライオット「うっせー。俺を止めたいなら、俺と戦つて勝て！」

フェイト「話を」

シグナム「無駄だ。言葉で彼をとめる事はできん」

フェイト「し、シグナム・・・くつ、なんとしてでもあなた達を止めます！行くよ、バルディッシュ！」

(Y e s , s i !)

ライオット「なら先ずは金髪の女が相手か・・・久しぶりに楽しませてもうせりゃー！」

俺はメリヒムの大太刀に水を、小太刀に雷を纏わせ、金髪の女に突っ込んだ。

なのは「あ、アリサちゃん！？」

『夜笠』から『贊殿遮那』を取り出して、なのはに切りかかる。なのはは反応しきれていないのか全く動かない。

アリサ（チエックメイトね）

そう思つたが、シグナムに受け止められてしまつた。やつを、ライオットと剣を交えていた気がするが、今ライオットと戦つているのはフュイトだった。

アリサ「ぐつ！」

シグナム「甘いな、殺氣が強過ぎる。紫電一閃！」

アリサ「がつ！」

何とか『蟄殿遮那』<sup>にえいののじやな</sup>で受けきったが、腕がジンジンする。

シグナム「魔力量が桁外れとはい、所詮はこんなものか・・・。剣技はそれなりに出来ているが、実戦の経験が足りないな」

アリサ「・・・フレイムファング！」

炎の翼から、赤色のファングが6つ飛び出す。

なのは「アクセルシューター！」

しかし、なのはのアクセルシューターにより、全て打ち落とされてしまつた・・・よう見えたが、元々魔力弾でないフレイムファングは傷ひとつ付いていない。

なのは「え！？」

アリサ「・・・斬りかかれ」

その言葉とともにファングの先端から赤い魔力刃が飛び出す。

シグナム「ここは私に任せて、あなたは後方支援を！」

なのは「は、はい！分かりました！」

アリサ「逃がさないっ！」

シグナム「行かせるか！」

シグナムと鍔迫り合いになる。が、刃を出したファングがシグナムに向かつて突撃する。

シグナム「くつ、厄介なものを・・・」

いち早く、シグナムは反応し、後ろに一步引いてファングを切り伏せてしまった。

アリサ「くつ、つまおおおおおー！」

シグナム「つまおおおおおー！」

また鍔迫り合いの形になる・・・と、思いきや、アリサの『贊殿遮那』<sup>にえとのじやな</sup>が弾き飛ばされてしまった。手元を離れた『贊殿遮那』<sup>にえとのじやな</sup>は弧を描き、回転しながら地面に突き刺さった。

シグナム「もうやめろ・・・お前にもう戦う術はない」



## 第19話「激突」（後書き）

やつと戦闘が始まったよ。でも意外と戦闘の描写が難しい。修行する必要がありますな。

## 第20話「勝機」（前書き）

未投稿のお話に一部改変があったので、更新の期間が伸びました。  
すいません。

キャラ・追加キャラ設定を一部改変いたしました。

作者「それではアリサさん、いつものぞひわー。」

アリサ「魔法少女リリカルなのは～Flames～はじめります」

## 第20話「勝機」

『ライオット side』

さつき居たピンクの女が居なくなっていた。辺りを見回すとそいつはアリサと戦っているようだった。

ライオット（あいつ、かなりの腕だつたな・・・だが、アリサも負けねーだろーな。剣術はほぼ俺が教えたんだし。）

フェイト「余所見とは、余裕ですね」

金髪の女が斬りかかってくる。俺は小太刀の方でそいつを受け止めつつ水を纏わせた大太刀で斬りかかる。が、しかし、避けられる。

ライオット「さつきからちよこまかちよこまかと避けやがって、いい加減当たりやがれ」

フェイト「当たる訳にはいかないっ！」

金髪の女が避けるせいで刀を空振る。空振る際に態と隙を作つてはいるが、罷と気付いているのか、なかなかあつち側から攻撃してこない。と、思つてゐるといきなり後ろから衝撃がきて50mほどぶつ飛ばされた。

ライオット「く、痛つて。一体何なんだよ？」

と、金髪の方を向くと、全身赤のチビが身体のわりにデカいハンマーを持っているのが見えた。

ヴィータ「作戦せーー！」

フェイド「うん！」

ハイタッチしているのが見えた。なんかムカつく。地面に磔はつけになつた俺はやや呆れた感じで呟く。

ライオット「ちつ、仲間が居やがつたか。くつそ、シーナ達は何してる」

シーナ「呼んだ？」

背後というより、頭の上から掛かった声に反応し、見上げてみるとその声の主であるシーナが突っ立つてこちらを見下ろしている。

ライオット「何してた？」

シーナ「見てた」

ライオット「手伝えよ。」

シーナ「下手に手伝うと、貴方の機嫌を損ねるかと思つて・・・」

ライオット「あーそーカい、なら手伝ってくれ」

シーナ「分かつた。ボクはどうちを？」

ライオット「あの赤いのだ」

シーナ「りょーかい」

ライオット「イルミナは？」

シーナ「アレンは緑の2人と犬2匹と戦つてる」

ライオット「救援は・・・・いらぬーな(ぐへへ、やられてしまえ)」

シーナ「貴方の顔が怖いです」

ライオット「うっせー、行くぞ」

シーナ「はい」

するとシーナは金の棒を持ったかと思つと、その金の棒は刃が2cmはある大剣になつた。

ライオット「こつも思ひがど、ビツヤつたらやんなモン振り回せんだ？」

シーナ「禁則事項」

シーナの返事にツッコミは入れず、「金髪の女に斬りかかった。

『アリサ side』

シグナム「もうやめる・・・お前はもう戦えない」

『贊殿遮那』<sup>にえどののじやな</sup>が弾かれて、地面に突き刺さってしまった。そこで一回シグナムと距離をとる。

シグナム「あの刀を取りに行かせるほど、私は甘くはないぞ」

シグナムはもう勝ったと思っているのだろう、攻撃を仕掛ける様子はない。だが、こちらはまだ戦える。なぜなら

アリサ「あたしの宝具が『贊殿遮那』だけとは思わないことね」

そう、『贊殿遮那』意外にも宝具はある。例えばこの

アリサ「『吸血鬼』みたいにね」

シグナム「ふつ、私にあえて剣で立ち向かうとはい一度胸だ。」

アリサ「はああああああああああああああああ！」

シグナム「大剣では必ずと言つていいほど、振りが大きくなる。軌道を読み、避けねば大したことはない」

シグナムはあたしの『吸血鬼』の軌道を読み、少し身体を反らす。見事に空振りに終わるアリサの一撃。

シグナム「ほうら、行つたとうりだ」

そういうながら、レヴァンティンを振り下ろすシグナム。

アリサ「ガハッ！？・・・くつ」

なのは「アリサちゃん！」

シグナム「大丈夫だ、安心しろ。今のは峰打ちだ。だが、次はないぞ」

シグナムの警告を無視して、『吸血鬼』<sup>ブルートザオガ</sup>を再び構える。

なのは「アリサちゃん・・・ごめん...ディバイン、バスター！」

アリサ「...」

ディバインバスターを難なく回避。すると、なのはがピンクの光球を1~2発ほど宙に浮かべていた。

なのは「どうやってでも、お話を聞いてもらひよー! アクセルショーター!」

なのはの脅威は威力の高い直射型と数の多い誘導射撃魔法。その一つを防げば、然して脅威はない。砲撃を無効にするという便利な宝具は無いが、手段が無いわけではない。

アリサ「『レギュラーシャープ』！」

シグナム「まだ宝具が! ? . . . あれば、トランプ?」

アリサ「ただのトランプじゃない。これは魔力を込めれば幾らでも増える」

だが、幾らでも増えるだけでそれ以外はただの変哲もないトランプだ。だが、使い方によつては攻撃にも使えるし防御にも使える。そして今は防御だ。なのはがこちらに向かつて放つアクセルシユーターをアラストールの制御で誘導し、アクセルシューターを確実に防ぐ。

シグナム「厄介なものを・・・」

アリサ「・・・」

もう一度『<sup>ブルートザオガ</sup>吸血鬼』をシグナムに向かつて構える。

シグナム「やめておけ、そんな武器でお前に勝ち目は無いー。」

アリサ「正攻法ならね」

そう、作戦は幾らでもある。今はまだ、そこまで大量に出せないけどアレがある。それに、『<sup>ブルートザオガ</sup>吸血鬼』は直接相手の体に当たなくても間接的になら効果がある。

アリサ「勝機はある」

第20話「勝機」（後編）

もつこの話まで来ちゃったよ。  
だいたい今は中盤くらいかな。

## 第21話「自在法」

『シグナム side』

アリサの顔が妙に自信に満ちていて嫌な予感がする。今までの経験上この嫌な予感は当たる。常に警戒していたほうがいいだろ。最悪後ろからの不意打ちもあり得る。ここは様子見に徹しよう。

『シーナ side』

ライオットが金髪の少女に斬りかかったのを確認してから、赤い服を着た子に向き直る。あちらはボクに気付いているようだ。

ヴィータ「そんなでけえのちゃんと使えんのか?」

シーナ「使えるに決まってる。じゃないとこんなもの持たない」

そう答えつつ刃が2mはある大剣、アラハバキを持ち上げる。すると、赤い子が指に鉄球を4つはさんでいた。

ヴィータ「シュワルベフリーゲン!」

(Schwabefliegen!)

赤い子が鉄球を打ち出した、ボクは咄嗟に大剣を盾代わりに突き出す。2発着弾したが、あの2発が来ない。と、辺りをキヨ口キヨ口見回していると背中と下腹部に交互に着弾した。

シーナ「ウニベル！」

「ヴィータ」へ、トロいな。これなら早々にぶつ瀕せるやーいべー  
アイゼン！」

( Jawohl! )

ヴィータ「カートリッジ、ロード！」

赤い子がハンマーを振り回し始めた。

ヴィータ「ラーケテンハンマー！」

ハンマーの後ろの部分をロケット噴射させながら突っ込んでくる。ボクは大剣の刃の側面を盾に、相手の攻撃に備える。

ヴィータ「つおじやああああああああああああああ」

シーナ「くっ！」

ヴィータ「このままだと折れちまうぜー！」

しかし、いつまで経っても大剣に鱗がはいる」とはない。しかも、傷一つ付いていないのだ。

ヴィータ「な・・・なんだよコレ、かてえ」

シーナ「君の打撃つて、そんなもの？」

ヴィータ「うるせえ！アイゼン！」

(Jawohl!)

赤い子のデバイスがカートリッジを一つ消費する。すると、今までよりほんの少し威力が強まった。

シーナ「やるね、でもそんな力じゃボクを潰せないよ？ハアツ」

大剣を振り回し、赤い子を投げ飛ばす。空中で体制を立て直しているのが見えたがそれは200mほど先。つまり、ヴィータは200m投げ飛ばされたのだ。

ヴィータ「何なんだ、何なんだよあいつ！」

## 『アリサ side』

『**吸血鬼**』<sup>ブルートザオガ</sup>を構えを一度解き、内にある膨大な魔力を練る。シグナムはそれに気付き警戒を強化している。

アリサ「実戦で使つのは初めてだけど、自在法『騎士団』…」

シグナム「自在法！？」

アリサの周りを紅蓮の炎が取り巻き、その炎の中から中世の騎士を思わせるような騎士甲冑が5体生まれる。

シグナム「何だ！？あれは」

生まれた騎士達は己が武器を持ち、主の命を待つように身構えている。

アリサ「行け！」

アリサの声と共に飛び出す騎士達。ランスや剣がシグナムに向かって突き出される。

シグナム「くつー」

流石のシグナムでも1対5、さらに騎士達の武術も達人の域に達する腕前。すぐにシグナムは切り伏せられ、地面に叩きつけられる。

シグナム「がはつ！」

アリサ「どうしたの？ もう終わり？」

シグナム「あれだけの制御をしているんだ。アリサ自身は動けないはずだ！ 高町い！」

なのは「準備は出来てます！ ディバイーン、バスター！」

既にチャージを終えた砲撃がアリサに向かって放たれる。『レギュラーシャープ』もいつの間にかすべて撃ち落とされていた。それを含めての”準備”だったのだろう。

アリサ「しつ、しまつた！」

ピンク色の極太の砲撃は、アリサのすぐそこまで迫っていた。炎の騎士達はアリサから離れていてとても庇かばえる距離ではない。

シグナム「戦いの最中に気を抜くのは負けも同然。私の勝ちだ」

アリサ「やられると……な訳無いでしょ」

アリサは片手を砲撃に向かって<sup>かざ</sup>翳し、障壁を張る。涼しげな顔でディバインダスターを防がれたのは驚愕の表情で固まる。

シグナム「馬鹿な、人間の形をした魔力の塊を5体も制御しながら何故動ける！？」

アリサ「そんなの決まってるじゃない」

騎士から『辯えとのじやな贊殿遮那』を受け取りつつ続ける。

アリサ「あたしが制御してないから、あたしは動ける。」

そうかと、気付き唇を噛み締めるシグナム。

アリサ「こいつ等は自立的に戦闘ができるの。便利でしょう。自在式は、ミッドやベルカの術式とは格が違うすぎるのよ

第21話「自在法」（後書き）

今日は短かつた気がするけどまあいいか

## 第22話「吸血鬼」

『イルミナ side』

今日の前には、縁2人と犬2匹がいる。4対1は流石の俺でも分が悪い。とか考えていたら、相手の方が話を持ちかけてきた。

ユーノ「あなた達は何でこんなことするんです！？」

アルフ「そーだー！」んなことに何の意味があるんだい！？」

イルミナ「貴様らには永遠に分からん。管理局で使い潰され捨てられた者の思いなど・・・」

そこで思い返す、昔あつたあの出来事を。

シャマル「何ですって！？」

ザフイーラ「それはどうじうことだ？」

イルミナ「だから言つただろ？、貴様らには到底理解できんと

ユーノ「あなたは何を言いたいんだ！？」

イルミナ「お前らのよつて管理局の闇を知らない連中は、黙つて見

ていればいいんだ

アルフ「あんたの言つことなんか聞けるかつてんだ！」

イルミナ「俺はあまり関係の無い人間を傷つけたくない。去れ」

シャマル「すずかちゃんを傷つけたあなたの言える台詞ですか！？」

イルミナ「あれば代償だ。管理局の闇を潰すためのな」

ザフィーラ「貴様！」

イルミナ「俺も最初は嫌だつたさ。10歳くらいの少女を傷つけるのは

アルフ「ならあんなことしなくても」

イルミナ「無理だな。今の俺達の戦力では到底管理局に対峙できない。アリサの力が必要だったのだ」

ユーノ「それなら別のやり方があつたんじゃないのか！？」

イルミナ「探したや、幾らN.O.-1の命令とはいえ俺にそんな度胸は無かつたからな」

ザフィーラ「何がお前をそづらせた？」

イルミナ「過去だよ・・・・俺の過去だ。あんなことを2度と繰り返させないためなら、俺はどんな手段を使ってでも管理局の闇を潰すと心に誓つた。それに、これはもしかしたらお前達のために

もなる「

シルヴィア・ロムウェーム大佐や死んでいった仲間達の最後の光景が脳裏に浮かぶ。

アルフ「あたし達のために、どうこうことだい！？」

イルミナ「犯罪者なんだろ。あそこ面白のとお前を除いて」

アルフ「それがどうしたって言ひんかい！」

イルミナ「お前たちも何れ用済みになるかもしれないんだ。だが、闇を潰せばその心配はなくなる。いい話じゃないか。どうだ、手を組まないか？」

ザフィーラ「4対1で不利を悟ったか。そんな口車に乗るほど我らは甘くない」

イルミナ「ならばしようがない。全力で俺を止めてみろ！俺は一人じゃない！」

遥か後ろからの援護射撃がくる。サーリヤの精密射撃だ。しかも威力をミーアの魔法で上げている、一発あたつても相当の魔力ダメージを受けるはずだ。だが流石は噂に聞くヴォルケンリッター。頑丈な盾を使うやつがいる。

研究所ではショットシリッターの下端が破壊活動をしているのを観認できた。

俺はヴィーザー・ヴールを起動させ、田の前のやつらに斬りかかった。

### 『ヴィータ side』

投げ飛ばされた後、やつとのことで体制を立て直したが相手から200mほど離れてしまった。

ヴィータ（何なんだアレは、化け物か！？ととりあえず、ギガント級の技で試してみねえとアレの強さが分かんねえ。）

ヴィータの意思で、グラーフアイゼンのカートリッジがロードされる。直後、グラーフアイゼンのハンマーが巨大化し、相手を叩き潰すために振り上げられる。

「ヴィータ『コレでブツ潰れる！ギガントショラーカ！』

振り上げられたハンマーはさらに大きくなり、相手に向かって振り下された。

### 『シーナ side』

しばらくしても相手の動く気配が無かつたので、アラハバキ大剣を地面に刺

して寄りかかっていた。すると、突然カートリッジをロードしだしたので慌ててアラハバキを抜き取り攻撃を待つた。

シーナ「砲撃が来るのかな。でも、ベルカ式はあまり遠距離の攻撃魔法は得意じゃないはず、って昔研究者が言つてたなあ」

警戒しながら様子を見ていると、赤い子の持つているハンマーが巨大化しこちらに振り下さられてきた。

ヴィータ「コレでブツ潰れろー・ギガントショーラーク！」

ハンマーが200㍍ほど離れたところへばらずも無いと思つていたが、勝手が違うようだ。

シーナ「持ち手まで伸びるなんて、そんなのアリなのか？」

愚痴をこぼしつつ、迎撃のためにアラハバキを振り上げる。鈍い金属音の後、ぶつかるテバイス同士の間から火花が散る。

シーナ「なんて重い一撃。これは少しきついかも」

いくら体を改造され力が強くても、振り下さられる大質量の物の

重力には敵わない。一瞬の判断でアラハバキを斜めに反らし、何とか難を逃れる。

シーナ「うあー、危なかつた」

逸れた打撃は地面を打ち、大きなクレーターを作った。

シーナ「コレ当たったら、流石のボクでも骨折くらいでは済まなさそうだな」

赤い子はハンマーを引き戻し、こちらに突っ込んでくる。シーナもアラハバキを構え、迎撃に備えた。

『アリサ side』

シグナムが起き上がり、レヴァンティンを構えるがシグナムの体はもうボロボロだ。

アリサ「もうやめた方がいいと思うわよ。あんた達に勝ち目は無い。大人しくあたしに殺されなさい」

だが、相手の一人は諦める様子も無く、再び己のデバイスを取り、

救うために戦おうとする。

シグナム「勝ち田が無くとも、諦める訳にはいかない！」

なのは「絶対にアリサちゃんを止めるのー！」

二人の言葉に動搖が隠せないアリサは悲痛な面持ちで一人に問いかける。

アリサ「なんで？何でそこまでしてあたしにこだわるのー？あたしはたくさんの人を傷つけてきたんだよーそれになの達だって！」

なのは「そんなの関係ない！アリサちゃんは・・・アリサちゃんは私のかけがえの無い親友だからー無くしたくなーいのー！」

シグナム「それに、あなたが居なくなれば主はやてが悲しむ。主の悲しむ姿は見たくない！」

一瞬戦意が喪失しかける。だが、シーナ達の顔が浮かぶと血ずと武器を握ってしまう。迷いが頭の中で巡る中、なのははこじらとばかりに言葉をぶつけた。

なのは「早く帰つて来てーみんな待つてるんだよーすずかちゃんだつて待つてるー！」

アリサ「すずかが……待つてる?」

余計に頭が混乱する。頭の中が考えで埋め尽くされる。

アリサ（すずかが待つてる!？そんなはずない、だってあいつらは  
すずかを……殺そうとした!だから今度はあたしを……  
そうか、そういうことだったのね。簡単じゃない）

アリサ「そんな言葉で惑わせて、あたしを殺すつもりなんでしょう?  
？」

二人はアリサの思いがけない一言に顔をしかめる。

アリサ「あたしはそう簡単に騙されない!騎士団、行きなさい!」

アリサの命令で5体の内3体がなのはの方へ、残り2体がシグナムの方へ飛び出す。アリサも右手に『贊殿遮那<sup>にえどののじやな</sup>』、左手に『吸血鬼<sup>ブルートザオガ</sup>』を構え、シグナムの方へ斬りかかる。

《シグナムside》

シグナム「せつきより手数が減つただけマシか。くつー」

アリサ「はあっ…でいいや…」

『吸血鬼』<sup>ブルートザオガ</sup>の一撃をレヴァンティンで弾いたその瞬間。斬撃がシグナムの体を切り裂く。

シグナム「ガハッ・・・・・・アリサに氣を取られすぎたか・・・いや、それにしては攻撃の角度がおかしい！何が起きた！？」

シグナム（周りの騎士達がやつたのだとしたら、ガラ空きな脇腹や背中に傷がつくはず）

シグナム（なのに何故、胸に傷が付くんだ！？）

第22話「吸血鬼」（後書き）

執筆に夢中で投稿を忘れてたぜ

## 第23話「戦つ理由」

『アリサ side』

アリサ「思いがけない場所へのダメージで驚いてるんでしょ？」

その言葉にシグナムは、はっと顔を上げアリサを睨む。そして問い合わせる。

シグナム「今、何をした？」

アリサ「その質問に答える義理はないわね。騎士団…」

騎士団<sup>ナイツ</sup>が再びシグナムに向かって攻撃を開始する。シグナムは防戦一方で攻撃を全くしてこない。なのはの方をちらりと見るが、状況はシグナムと変わらないようだ。

アリサ（一人が動けなくなつたといひドトドメを刺せばいい。無理に攻めて手傷を負うのは嫌だしね）

高見の見物を決め込むことにした。

ライオット「オラ！」

フェイト「くつー！」

二人のデバイス同士が交差し花火を散らす。ライオットは空いた左の大太刀に水を纏<sup>まと</sup>わせ横に薙ぐ。フェイトはいち早く反応し、鎧迫り合いを解き距離をとりつつプラズマランサーを8発セットする。

フェイト「プラズマランサー、ファイア！」

8発の光弾がライオット目掛けて放たれる。ライオットは直線的な射線を描くプラズマランサーを難なく避け、大太刀から伸ばした水の鞭<sup>むち</sup>をフェイトに向かつて振り下ろす。フェイトはギリギリのところでそれを避け、プラズマランサーに指示を送る。

フェイト「ターンー！」

ライオット「ターン？・・・・・まさか！」

後ろを振り返るライオットだが、既に遅く着弾を許してしまつ。

「ライオット」「ぐつー···やるじゃねえか。てめえ、名前はなんて言つただ?」

フロイト「フロイト・T・ハラオウンです。あなたは?」

ライオット「俺はライオット・アルビオ」

フロイト「アルビオさんは何でこんな事を?」

ライオット「そりゃ、今の目的は強えヤツと戦うことだからな。正直、施設の破壊活動みたいなつまらねえことはやりたくないんだ。お前と戦つてた方がおもしろい」

フロイト「では質問を変えます。何故シユウシリッター?」

少し間を置いて答える。

ライオット「復讐のためだ」

フロイトの顔が少しばかり引きつる。

ライオット「俺はな、管理局の上層部に邪魔者扱いされてたんだよ。そして消されかけた。家に帰つてみたら家族は殺されていたよ、管理局にな。でも局の書類上では居もしない架空の犯罪者に殺されたことになつてたな。」

フェイト「復讐といつ」とは・・・

ライオット「俺の殺人未遂と家族の仇。それだけだ」

フェイト「管理局がそんなことをするはずが無い！」

ライオット「そんなことを言えるんなら、お前は局内で真面目に働くいいヤツだ。だが、管理局も一枚岩じやねえ。俺らはその中の闇を打ち倒すためにこうやって戦ってる」

フェイト「管理局の・・・・・闇？」

ライオット「ああ、そいつらは次元犯罪者の研究員の一人を雇っていたな。確か名前はジエ・・・なんだつけ？まあ、俺らはそいつも利用して一気に摘発して、復讐を果たす」

フェイト「その闇の人たちを捕らえたらどうするつもりなんですか？」

ライオット「もちろん、殺す」

フェイト「そんなことはさせません！」

ライオット「ヤツらの味方になるつてのか？」

フェイト「いいえ、あなたのよつな人に入殺しの罪を課したくないからです」

ライオット「止めるつーんなら、俺を殺しても止めるんだな！」

そう言いつつ、左の大太刀で斬りかかる。フェイトはバルティッシュでその攻撃をいなす。

フェイト「絶対に誰も殺させません。もちろん、あなたも」  
ライオット「理想論だな。・・・・・興が殺そがれた。そうだ、一つ忠告しておく。死にたくなかつたら、管理局を離れろ。それだけだ、じゃあな」

俺は転移魔法を使い、合流地点へと向かった。

『イルミナ side』

今の状況を言つと、ユーノ、アルフ、シャマル、ザフィーラの4人は地面に縛られている。

イルミナ「呆氣ないな」

ユーノ「何だこのバインド、硬すぎるつ」

ザフィーラ「くつ、壊せん！」

シャマル「私達をどうするつもつー？」

イルミナ「どうもしないさ。もつ作戦は終わったからね。ちなみに  
そのバンドはあと10分経てば自然に壊れるから安心しろ」

転移魔法を発動させ、先ずシーナの元へ向かつた。

第23話「戦つ理由」（後書き）

ひょっと見直してみると短い気がするけどまあいいか

## 第24話「虹天剣」

『シーナ side』

大剣とハンマーのぶつかり合つ音が2・3度続き、二人は距離をとる。二人とも息を切らしていく、お互いボロボロの状態だ。

シーナ「はあ・・はあ、ボクを息切れさせるなんて、はあ・・はあ、初めてだよ」

ヴィータ「の割には、ぜえ・・はあ、随分と余裕そうじゃねえか」

お互に最後の力を振り絞つて、再び激突しようとする。そのとき、二人のデバイスの間に抑制が働く。

ヴィータ「て、てめえ！」

二人のデバイスを抑えていたのはイルミナだった。

シーナ「何するの?アレン」

イルミナ「今回の目的は果たした。帰るぞ」

シーナ「分かった。決着はお預けだね、赤ちゃん」

ヴィータ「赤ちゃんじやねえ！ヴィータだ！」

シーナ「へえ、ヴィータちゃんね。ボクはシーナ・クジヨウって言うんだ。じゃあね」

ヴィータ「ちょ、待ちやがれ！」

ヴィータはシーナとイルミナに向かってグラーフアイゼンを振るうが、空振りに終わった。

### 『アリサ side』

シグナムとなのはは騎士団ナイツと一進一退の攻防を繰り広げていたが、体力が尽きてきたのか防戦一方になってしまっている。

アリサ「そろそろ終わりのよひね

トドメを刺すために自在法を発動させる。

アリサ「『紅蓮の大太刀』つー！」

『贊殿遮那』とアリサの手の間から溢れるように炎が湧き出し、それはアリサの身の丈の数倍に及ぶ炎の大太刀に変わる。それをシグナムとなのはに向かつて振り下ろされようとする。

アリサ「はああああああああ！」

シグナムとなのはは騎士団に身動きを封じられ、避けることもままならない。

なのは「さやああああああ！」

シグナム「ぐつ、こゝまでか！？」

アラストール「アリサ、上だ！」

アリサの放つ紅蓮の大太刀が当たろうといつ瞬間、アラストールの声で上を向いたアリサの体は白い光と共に吹き飛ばされ、地面に思いつきり叩きつけられる。

アリサ「が・・はつ」

なのは達が白い光の元を田で辿ると、そこにはやでがシユベルトクロイツを振り下ろし佇んでいた。

はやて「じめんな。でも、これ以上アリサちゃんの罪は重くしゃり  
れへん」

その姿にシグナムとのはは驚きを隠せない。

はやて「間に合つてよかつたわ。先ずはそのなのせぢやんとシグナ  
ムの周りにある邪魔者を消せんとな」

はやは呪文の詠唱を始める。

はやて「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち  
貫け。石化の槍、ミストルティン！」

白い光は5体の騎士に当たり、騎士達はそのまま石化し崩れてい  
く。

シグナム「主はやて、お体の方は大丈夫なのですか？」

はやて「へーきや、へーき。さて、アリサちゃん。もつやめこせん  
か?こんなことに意味なんて無いで?」

なのは「アリサちゃん……」

アリサは『贊殿遮那』を地面に突き立て、フラフラと立ち上がる。

アリサ「うる・・・さいつ・自在法・・・」

『贊殿遮那』に虹色の炎が灯り、その炎がしだいに大きくなる。

アリサ「虹天剣！！」

一閃させた『贊殿遮那』の軌跡に沿って直線の光線が放たれる。

なのは、はやて、シグナムの三人はギリギリのところで掠らずに避けた。威力を弱めることも無くそのまま一直線に延びた光線は山に直撃し、山を上半分消し飛ばした。

はやて「なんつー威力や！？」

なのは「スター ライトブレイカーより威力が大きい」

シグナム「掠つても腕の一つや二つ、簡単に吹き飛ぶかもしれん。これが自在法の力なのか！？」

アリサは再び虹色の炎を『贊殿遮那』に纏わせ、もう一度『虹天剣』を放とうとするが

アラストール「それを撃つてはならん！慣れない魔力量の消費で体が持たんぞ！」

アリサはアラストールの警告も耳に入っていないのか、ふらつきながら『贊殿遮那』にえとののじやなを一閃。今度はどうにも当たることなくそのまま空の彼方へと消えていった。

アリサ「うつ

バサリと地面に倒れるアリサ。体力が尽き、体に力が入らない。意識が遠のく。最後に見たのは本当に心配そうにする、なのはとはやての顔だった。

『はやて side』

はやて「これは慣れない量の魔力を消費して気を失つてしまつたか。でも、山半分吹き飛ばすつて、どんな威力やねん」

シグナム「しかし、アリサが何も無い空間に誤射したおかげでどこにも被害は出ず、さらに今、アリサは動けない」

なのは「今のうちにアリサちゃんを保護しないとね」

三人はアリサに近づき、ハイハイに連絡を取りついかる。

「アラストール、アリサに触れるな！」

はやて「なんや、なんや？ 今はシグナムか？」

シグナム「いえ、私では

シグナムがそう言つので、必然的なのはの方を向く。

なのは「私じゃないよ！」

アラストール「この子は貴様らには渡さんぞ！」

よく耳を澄まして聞くと、アリサの胸の辺りから声がした。

はやて「うわ、もしかして蝶つとったんほの宝石か！」

アラストール「わっ、我にも触れるな！」

はやて「なんや、おもひこな。やうや、シグナム、この武器一つも回収せ

アラストール「貴様らこそやうど！」

シグナム「ああ」

宝石が喋ると、一つの剣は吸い込まれるようにアリサの黒いロートに入つていった。はやてはそれをひりひりせながら囁く。

はやて「なんやこれ、どうなつてる?」

アラストール「貴様らに教えても何の価値も無い」

はやて「なんや、連れへんなあ」

セウーハしてこる内に、エイミヤさんから転送の準備が出来たと連絡があつたのでついでに自分達もアースラに引き返すこととした。

「アリサはない」

影が一瞬目の前を通りすぎると、既にアリサの姿は無くなっていた。

はやて「だれやー?」

はやてが叫ぶと一人の少女がアリサを担いで歩いてきた。

シーナ「アリサは渡さない」

なのは「返して!」

シーナ「返さない」

なのはの叫びに即答するシーナの隣に一人の男が降り立つ。

なのは「あなたは、イルミナさん!」

イルミナ「君達にアリサを渡すことは出来ない。そりばだ」

はやて「ちよ、待ちい!」

イルミナははやての言葉を無視して転送魔法を発動させ転移してしまった。

はやて「あのイルミナって人と話をせなあかんかもな

第24話「虹天剣」（後書き）

う・・・腕が・・・。

## 第25話「再戦」

『ライオット Side』

イルミナ達と合流地点で合流したあと、『黒黎殿』に帰還した。アリサは部屋のベッドで寝かせてある。

ミーア「慣れない量の魔力消費で体に負荷がかかつてしまつたようですね」

ライオット「…………」

シーナ「心配してるのは？」

ライオット「うひゃー、そんなんじゃねえよ」

サーシャ「本当はす」「心配なんだろ？？」

ライオット「うひ、うひよー。」

ミーア「ライオットって仲間に對しては物凄く過保護になるよね」

「こんなやつらに付かれてられない俺は、早足でギルバートのもとへ向かった。

いつもの広間に着くと、ギルバートがいつものよつこ玉座に腰掛けふんどり返つてこむ。俺の後に他のやつらも揃つたよつなので

話を始める。

ライオット「次の作戦は?」

ギル「第37無人世界だ。たぶんここで違法な研究所の破壊は終わ  
りだ」

ライオット「その次は?」

ギル「地上本部と本局だ」

ライオット「いよいよここまで来たんだな」

ギル「ああ、お前達には苦労を掛けた」

イルミナ「では行つて来る」

ギル「ああ」

俺達は第37無人世界へと飛び立った。

『アリサ side』

目が覚めるといつもの部屋に居た。近くのテーブルにアラストー  
ルが置かれている。

アラストール「目が覚めたか？」

アリサ「うん」

アラストールはアリサが悩んでこることに気付き、問いかける。

アラストール「あの、なのはとはやてと言つ少女達が気になるのか？」

いきなり核心を突かれ、動搖を隠せないアリサはおどおどとつた感じで短く答える。

アリサ「うん」

アラストール「確かに、我も良く見定めてみたが、簡単に人を傷つけるような人間には見えなかつたな」

アリサ「……」

アラストール「彼女達が言つていたように、すずかという者はアリサに会いたがつているのではないか？」

アリサ「でも、あたしもつ後戻りできない……。傷つけちゃつたもん。みんなを」

アラストール「我はそうではないと思つた」

アリサ「へ？」

アラストール「アリサはとても良い友人に恵まれているということだ。さて、これからどうする？」

アリサ「そういえば、みんなは？」

アラストール「そういえば、見かけないな」

アリサ「まず、みんなを探そう」

アラストールを首に掛け、先ずはいつもの広間に向かうことになった。

いつもの広間が近くなると、ギルと誰かが通信で話している声が聞こえた。

ギル『ジエイル、例のモノは用意できたか？』

ジエイルと呼ばれた人が通信の相手らしい。いつの間にか足を止めて、その話に聞き入ってしまった。

今、なのは達が乗つていいアースラは再び現れたシユウツシリッターの元へと急行していた。なのははアースラ内の訓練室でトレーニングをしている。と、そこにヴィータが入ってきて心配そうに声を掛ける。

ヴィータ「おい、少しば休めよ。あと20分したら着くんだからよ」

ヴィータの心配に反し、なのはは止める様子を見せない。

ヴィータ「…………」

ヴィータはただ見ていることしか出来なかつた。止めても無駄だと分かつていたからだ。だが、止めても無駄だと分かつっていてもこのときは強制的にでも止めをせていれば誰も後悔することはない無かつた。

### 『ライオット side』

破壊活動が始まつて1時間。今まで研究員程度しか居なかつたのに……

ライオット「チツ、今まで研究員程度しか居なかつたのに……」  
・・・  
梃子摺<sup>てこす</sup>らせやがるぜ、ミーア！」

ミーア「分かつてあります」

ミーアの周りを囲むように、半径5mはありそうな円陣が現れる。

ミーア「我を護りし三対の守護神の一つよ。その力を持つて神罰を  
与えよ。龍騎招来、天災地変、我が命に従い、こ来よ、ヘラクレイト  
ス！」

円陣から銀色の鱗うろこをもつ巨大な龍が現れ、その龍が火を噴くと辺りが炎に包まる。

ライオット「これで粗方片付いたな。帰るぞ、イルミナ」

イルミナ「ああ、そうしそう」

イルミナの転移魔法で『星黎殿』への帰路についた。

『すずか side』

「」最近目を覚ました私はとても元気が出なかつた。食欲もあまり無い。

すずか（なのはちゃんや、フェイトちゃんや、はやてちゃんは来てくれるのに、なんでアリサちゃんだけ来ないんだろ）

そう、たとえ管理局の管轄化に置かれている病院でも、友人のお見舞いは許してくれるはず。しかし、アリサは一向に来る気配がない。

すずか「嫌われちゃったのかなあ、私」

一人、上の空になっていた。

### 『はやて side』

はやで、ヴィータを除いたウォルケンリッターの三人はアースラの艦橋でリングディ、エイミィ、他のクルー達と第37無人世界に着くまで待機していた。

ユーノはシグナムとはやての依頼を受けて本局に戻っている。

エイミィ「—第37無人世界で大きな魔力反応！恐らく、召喚魔法の類かと思われます」

リングディ「召喚師までいるの！？厄介だわ、少しショックリッター

を侮っていたみたいね

ハイミィ「かなりの大型の召喚獣と思われます。・・・・・あれ、召喚獣の反応口ストしました」

リンク「多分引つ込めたのね。目的地到着まであとどれくらい?」

ハイミィ「あと15分はかかります。!、転送魔法使用の可能性があります!逃げられますが、どうします?」

リンク「ここで泳がせて、本拠地を突き止めるのもアリかもしないけど、ここは攻勢にでるわよ。みんな、準備して」

ハイミィ「ですが、敵の転送先なんて」

リンク「大丈夫、多分ここなら辺りで一回中継を取るはずよ」

ハイミィ「なんでそんなことが ま、魔力反応!?!の付近ですか!」

リンク「みんな、出撃よ」

みんな「はーっ!」

第25話「再戦」（後書き）

なんか随分間が空いちやつたんだぜ  
「めんなさいだぜ

第26話「脱出」(前書き)

かなりストーリーペースになってしまったorz

## 第26話「脱出」

『アリサ side』

通信相手との会話は全てこちらに簡抜けになっていた。

ギル『ジェイル、例のモノは用意できたか?』

ジェイル『出来ているよ。50体くらいあれば問題はなかろう?』

ギル『十分すぎるな』

ジェイル『私はコレを元に、新型を作つておいたがまだ実験段階中でね。』

ギル『そう言えば、戦闘機人なるものを造つたと聞いたが、本当か?』

ジェイル『ナンバーズのことだね。今までに6体造つたが、その内2体は管理局に連れて行かれてしまったよ』

ギル『大丈夫なのか?』

ジェイル『どうと云つことは無いさ。後で回収すれば問題ない。あ、ナンバーズを貸すことはできないからね』

ギル『何故だ?』

ジェイル『どうやら此処の場所がバレてしまつてね。近々、管理局の職員が乗り込んでくるかもしないんだよ』

ギル『局員は全員殺すのか?』

ジェイル『素材が良ければ実験体にするわ』

ギル『随分な自信だな』

ジェイル『それは君の方だろ?。管理局相手に戦争を仕掛けているよつなものだ。だが、勝機はあるんだろ?。』

ギル『当たり前だ。策はある。それに、いざとなればアリサを使って『天破壊碎』を暴発させれば一瞬で片がつくし、この『星黎殿』もある』

ジェイル『アリサとはあのデータにあつた子か。だが、その『天破壊碎』を使えば彼女は・・・』

ギル『おそらく絶命だな。歴代の扱い手では己の放出する魔力に耐え切れずにショック死を起こしているしな』

ジェイル『もし死ねば、私のところへ譲つて欲しいな』

ギル『実験体か?』

ジェイル『ああ、それに、何かと役に立ちそつだしな。他のメンバーはどうするんだ?』

ギル『あんな物、ただの捨て駒に過ぎん。勝手に管理局にでも捕まつていればいいし、死んでくれてもいい』

アリサとアラストールはジェイルとギルの会話に驚愕した。アリサは無意識に一步後ずさつてしまう。その足音が広間に響き、二人に気付かれてしまつ。

ギル『誰だ!』

ジェイル『この話を聞かれてはまずい』

ギル『分かつていてる。』

ギルは立ち上がり、こちらに向かって来る。アリサは逃げるために走り出す。

ギル『管理局か?だが、こここの所在は『秘匿の聖室』クリュブタの効果で探知や察知は出来ないはず』

アリサはすっと走っているが、子供と大人の体力には差がある。それにアリサは女の子で、ギルは男性だ。体力の差は歴然、すぐに追いつかれてしまう。

アリサ「ハアハア、つく」

ギル「アリサか、この話を聞かれてしまったからには仕方が無い。  
計画実行まで眠つてもいい」

ギルが術式を発動、掌をこちらに向け波動を放つてくる。

アラストール「アリサ！」

アリサ「くつ

『夜笠』でギリギリ防御する。

アリサ「自在法、『騎士団』！あたしを守つて！」

自在法で馬に乗った騎士を5体出して足止めをせる。

ギル「小瀆な真似を！ふんつ！」

アラストール「あやつの力量は分からないが、足止めにはなるつ。今のうちに外へ出るぞー。」

アリサ「うん」

もう一度『騎士団』を発動させ、今度は馬を作る。その馬に鞭を打つて走らせる。

しばらくすると出口に到着した。

アラストール「どうやら、追いつくる気配は無いようだな。これか  
らどうする?」

アリサ「先ずアレンのところに行く。座標を教えて」

アラストール「承知した」

アラストールから流された座標を設定して、転送魔法を発動させる。

アリサ「間に合つた!」

長距離の転送には時間が掛かる。その間にギルバートに追いつかれればおぞらく殺されてしまうだろう。走る足音が、だんだんと近づいてくる。

アリサ「『騎士団』はもうやられたの?」

アラストール「いや、どうやら『騎士団』を振り切つてこち  
らに来たようだ」

アリサ「もづ、あと少しつ・・・」

転送まであと数秒とこりこりでギルバートがアリサの元へとた  
どり着くと同時にギルバートはアリサに向けて右手を突き出<sup>かさ</sup>す。

ギル「ステイグマータ!」

アリサ「！？・・・・・あれ?なんとも無い」

アラストール「今のうち!」

アリサ「うん」

ギルバートが放ったステイグマータも何の効果も無く。そのまま  
転送は完了してしまった。

## 第26話「脱出」（後書き）

一応ここでの『ステイグマータ』はギルバートが独自に開発したもので、灼眼のシャナ原作の『ステイグマータ』とは違うので、そのへんよろしくお願ひします。

## 第27話「離反」

『ギルバート side』

アリサにはあつからりと逃げられてしまったが、逃げられる直前に放つたステイグマータはしつかりと当たったことを確認した。

ギル「ステイグマータはアリサの自在法を解析してリサイクル式に組み替えたもの……効果に期待しよう」

ギルはさつきの大広間まで戻ると、待たせていたジェイルとの通信を再開する。

ジェイル『どうやら逃げられてしまったようだね』

ギル「ああ、だがこの『星黎殿』を残して行つてくれたのは好都合だ。後々役に立つ」

玉座に座りながらジェイルに返事をする。

ギル「早急にアレの出撃をさせてくれ」

ジェイル『狙いは?』

ギル「アリサ・バーニングスだ」

『なのは side』

艦内放送がかかり急いで転送ポートへ向かう。

ヴィータ「少し休んだ方がいいんじゃないのか?」

ヴィータは心配そうな顔をしてなのはの顔を覗き込んだ。

なのは「ううん、大丈夫。何とかしてアリサちゃんを取り戻すよ」

ヴィータ「ああ、そうだな」

話しているうちに転送ポートに到着すると同時に体が光に包まれて転送が始まった。

なのは（待つててね。アリサちゃん）

『ライオット side』

イルミナが中継を取つた次元世界で異変が起つた。

イルミナ「結界か！？」

サーチャ「先回されたか」

ライオット「だらうな」

ミーア「たつ、大変です」

イルミナ「まあ、隊員たちを先に送つておいて良かった。足手まといになりかねないからな」

サーチャ「結界の解析は？」

イルミナ「流石管理局といったところだ。時間が掛かる」

ミーア「あわわわ、どうしましょ」

シーナ「時間切れ」

シーナはそつと一つづつ指を指す。皆はそれに釣られて目を動かす。

イルミナ「待つてくれそつには見えないな。サーチャ、ミーア後方

支援は」

イルミナが指示を出す前に何者がミーラとサーチャに刃を向けていた。

「フロイト」「動かないで下さー」

「ライオット」「詰み・・・だな」

しばらぐして仲間と見られる人たちがやって来る。

はやて「ほな、話を聞かせてもらおかな? もあうん拒否権なんてもんはないで」

そこで一人の少女が違和感を覚える。

なのは「アリサちゃんは? アリサちゃんは何処なの?」

その言葉に仲間の人たちも気付いたようだ。

イルミナ「アリサはここには居ない。我々の本拠地でまだ眠っているだろ?」

はやて「それって・・・」

イルミナ「そうだ。前に倒れてしまつてから田を覚ましてない。相当疲労がたまつていたのだろう」

はやて「そんな」

『はやて side』

はやて「そんな」

はやての声を遮つて、アースラからの通信に入る。

『ハイハイ』巨大な魔力反応が近づいてるよー!アリサちゃんかも!』

その話を聞いたのは既に動き出していた。

ヴィータ「おい、ちょっと待てよー!」

ヴィータの声にはやてが気付く。

はやて「ヴィータ、どうしたん?」

ヴィータ「なのはが魔力反応があつた場所に行つちまって・・・それで、止めようとしたんだけど、聞かなくて・・・」

はやて「今はあまり人員が他に割けへん。ヴィータ、なのはちゃんのどこに行つてくれへんか?」

ヴィータ「分かった。すぐ行く」

ヴィータは見えなくなつたなのはの後を追つて飛び立つた。

## 第27話「離反」（後書き）

涼宮ハルヒの驚愕ゲート！！

待ちに待つただけあつて読むのが非常に楽しみだあ

## 第28話「和解と誤解」

『アリサ side』

アラストールから受け取った座標をもとにたどり着いたのは、雪の降る丘の上だった。

転送の直後、少し身体が重く感じられた。

アリサ「本当にここであつてるの？」

アラストール「間違いない。ここから北に30kmのところにイルミナの気配が感じられる」

アリサ「そう。じゃあすぐ行くわよ」

アリサが飛行魔法を使おうとしたが、アラストールが待つたをかける。

アラストール「待て。誰か来るぞ」

アリサ「見えてる」

しばらくして、米粒くらいだった影がだんだん大きくなり、そしてそれはまるまるうちに親友の姿へと変わつていった。

なのは「アリサちやん

アリサ「な、なのは!？」

そしてなのはアリサの田の前に降り立つた。なのはの顔は少し疲れているよつこせ見える。

なのは「良かつた。無事で」

なのはの女心しきつた顔を見て、アリサは驚きを隠せずに詰め寄る。

アリサ「な、何言つてんのよ!…あたしはあなたの敵よ!…」

なのは「アリサちゃんは敵なんかじゃない。親友だよ

アリサ「だつてあたしはみんなを傷つけたんだよ!…」

アリサの声はどこか救いを求めるかのような、そんな声だった。だからなのはは言つてやつた。もうひとと、誰も気にしていないと、いつ救いの言葉を

なのは「いいんだよ、アリサちゃん。もう、いいんだよ。間違いは誰にだつてあるんだよ？今日はその間違いがたまたま大きかつただけ……」「

アリサ「な……のは、つづく……つああああああああああああ

今まで張り詰めていたのが解ほかれて、アリサは泣きながら地面に崩れ落ちた。

なのははそんなアリサを抱きしめるかのように両腕で包み込んだ。

アリサ「みんなが離れていくと思うと怖かった。ぐすつ、なのはあ、なのはあ」

なのは「大変だつたね。でももつ大丈夫だよ。みんなも心配してるし早く帰ろ？」

アリサ「うん」

二人は手を繋いで一緒にアースラに戻りつとした。が、そのとき

なのは「！、アリサちゃん危ないっ！」

なのははアリサの手を思い切り引つ張つて引き寄せようとする。しかし疲労の所為か、その一瞬、目眩に襲われ、もともとアリサが居た場所に転げてしまった。

ザスツ

肉を切り裂く嫌な音が響く。なのはの胸下辺りに血だけが三角形の形を作つて不自然に浮いている。その血が零となつて、白い地面に赤い斑点を描く。

やつと仲直りが出来た親友を傷つけられた怒りで我を忘れ、所構わず『紅蓮の大太刀』を乱射する。すると、何も無いはずのところに当たり爆発を起こす。煙が晴れれば、そこには機械らしき残骸がいくつも散らばっている。10発くらい撃つと反応がなくなりその後はただ虚空を斬るだけとなっていた。

そしてアリサは息を切らしながらのはの元に歩み寄る。

突然後ろの方から誰かの叫び声が聞こえる。それはヴィータのものだった。

ヴィータ「よくも、よくもなのはをやつてくれたなー!」

アリサ「…? 違う、これは」

ヴィータ「うつせー!」

ヴィータの力任せな一振りは不意を突かれたアリサを軽く打ち飛ばす。その衝撃で、アリサの意識は暗い闇の中へと落ちていった。

## 第28話「和解と誤解」（後書き）

間が開いてしまいました。すみません。  
これから忙しくなりそうなので、一ヶ月に2～3回のペースとさせていただきます。

第29話「野望」（前書き）

更新遅れてすいません

## 第29話「野望」

《ヴィータ side》

アリサを撃ち飛ばしてすぐに、なのはの元に駆け寄る。

ヴィータ「なのは、なのはあ！」

なのは「だ・・大丈夫だよ。それに、アリサちゃんは悪くないよ」

ヴィータ「何言つて・・・・・あ」

冷静さを取り戻したヴィータは周りの様子を見て気付いた。何らかの機械の残骸が散らばっていることに。

ヴィータ「これって？」

なのは「アリサちゃんを狙つてたから、避けようとアリサちゃんの手を引っ張つたんだけどね。疲労がいけなかつたのかな？眩暈がしてそれで・・・」

ヴィータ「分かつた！分かつたからむづ喋るな！」

なのはの顔が青白くなつてきて声も弱々しくなつてきている。そ

ここにアースラからの通信が入った。

リンディー「一体何があつたって言うのー?』

ヴィータ「なのはがあ・・・なのはがあ

リンディー!かなり危険な状態ね。すぐこちらに転送するわ

ヴィータ「早くしてくれ!」

かなり切羽詰っていたヴィータはアリサのことに気を配る暇もなく、重体のなのはと共にアースラへと戻ってしまった。

『アリサ side』

目を覚ますと、機械の残骸に埋もれていた。

アリサ「くつ・・・」

体中が軋むように痛い。

アラストール「大丈夫か?アリサ」

アリサ「うん」

アラストール「嘘とはぐれてしまつたな」

アリサは辺りを見回して雪の上に残つていた血痕に気付く。

アリサ「なのははー? なのははさどうなつたのー?」

アラストール「ヴィータと言う少女が連れて行つた

アリサ「そ、そう」

アラストール「これからどうするつもりだ?」

アリサ「ギルバートの計画を潰しに行く。散々あたし達を利用して  
くれた罪を償わせるためにね」

アラストール「だが、ヤツは『星黎殿』を持っているが・・・」

アリサ「アラストール、本當は分かつてゐるくせに・・・」

アラストール「そうだったな」

アリサ「行くわよー」

アラストール「承知した」

アリサは炎の翼『紅蓮の双翼』を展開し、その場を飛び立つた。

### 『ギルバート side』

ギル「時は満ちた。ついに・・・ついにこの時が来た!」

ギルは両手を天に翳しながら続ける。

ギル「憎き管理局を潰し、この私が全ての支配者となるこの時が・・・」

ギルは駒として使い捨てた者達の姿を思い浮かべて不敵に笑う。

ギル「今まで働いてくれた人形達には、私の勝利の曉には死と言つ  
ゝ褒美をくれてやろう」

『星黎殿』は動き出す。時空管理局本局に向かって・・・。

## 第29話「野望」（後書き）

今回はかなり短いと思いますが、まあ気にしないで下さい

### 第30話「捕縛」（前書き）

インターネットが回復したので、やっと投稿を再開できました。

### 第30話「捕縛」

『イルミナ side』

閉ざされた空間の中には手足を縛られたイルミナ、ライオット、  
サービスヤ、ミーノアと手足を縛られつつ檻の中に入れられたシーナが  
いる。そして彼らと向き合つようにして管理局の人たちが椅子に腰  
を下ろしている。

リンディ「それで、あなた達の目的は何なの？」

イルミナ「管理局の悪の殲滅だ。せんめつ」

ハイミィ「信用なりませんね」

ライオット「信用も何も。俺達が破壊行動をしてきた場所を考えて  
みろよ」

リンディ「確かに資料には民間の研究所や工場と書いてあつたけど・・・  
・・・」

ライオット「ハアー？」

ガタツ

ジャキッ

シグナム「大人しくしていろ」

ライオット「へーへー」

リンディイ「それに、私の話は終わってないわ。せっせはそう言ったけど、あなた達が破壊行動を起こした研究所や工場を管理している企業はすべて存在していなかつた。つまり、架空の企業だつたと言うことよ」

イルミナ「理解したか?」

リンディイ「まあ、時空管理局とは言つても一枚石じやない。私としてもそういう所は見るに堪えかねるわ」

サーチャ「それならばこちらの言い分を」

リンディイ「だからと言つて、私はあなた達を許す訳じゃない。もつと和平的な解決方法があつたでしょ?」

ライオット「それが出来ていればどれだけ楽だつたか」

リンディイ「それって、どうこいつ」と?」

リンディイは頭の上に疑問符を浮かべながら訊ねる。

イルミナ「話せば長くなる。ライオット、サーチャお前達もそつだ

ルウヘ「

ライオット&サー・シャ「「ああ」」

イルミナ達は洗い浚い包み隠さず話した。ニアやシーナのこれまでの経路も、自分達の過去についても。

シグナム「そんなことを管理局がするはずないだろー提督も何か言つてください」

リンクティ「そうね。流石に信じられないわ。まさか管理局が人体実験したりしていたなんて到底思えない」

イルミナ「皆さう思つから管理局にいじょうに利用されるんだ」

ライオット「『管理局は正義の味方』、『管理局が悪いことをするはずが無い』そんな固定観念に囚われて平和ボケしてゐるから見落とす」

サー・シャ「私達もそりやつて省かれた存在だ。さらば、サー・シャという物的証拠も存在している」

リンクティ「そうだったわね。もし管理局がそんな存在ならば黙つているわけにはいかないわ。エイミィ、お願ひ

エイミィ「調べればいいんですね?了解しましたっ!」

イルミナ「待て!」

エイミー「ん？」

イルミナ「そんなことをすればお前達もいすれか消される。止めておけ」

リンティ「あなた達が言ったことを信じるのならば確かに危険ね。でも、見過さずわけには行かないのよ。管理局の一員として」

イルミナ「フツ・・・貴女のような方が管理局のトップに立つていれば俺達はこんな事をしなくても良かつたんだがな」

イルミナはそう呟きながら明日後日の方に向を見つめていた。

『なのは side』

目が覚めるとヴィータがなのはのベッドに突っ伏していた。よく見てみると、すうすうちと寝息を立てているようだった。なのはは体を起こしようと試みるが全身を襲う痛みがそれを良しとしない。どうやら本局の病室らしい。

なのは「く・・・つー」

そんなんのはの行動に気付いたのか、ヴィータが覚めたばかりの目を擦りながら辺りを見回す。

ヴィータ「なつ、なのは…よかつたあ、ホントに良かつたよお」

なのはの目が開いていることを確認した、ヴィータはそのままなのはに抱きついた。

しかし、なのはは誰かを探してこちらじへ、辺りをキョロキョロと見回していた。

ヴィータ「どうした？なのは」

なのは「アリサちゃんは？」

なのはがそう訊いた瞬間、ヴィータの顔は怒りに染められた。

ヴィータ「あいつならあたしがやつた」

なのは「やつたって、アリサちゃんをどうしたの？」

ヴィータ「アイゼンでぶつ飛ばした」

ヴィータは当たり前といった表情で言い放つ。が、なのはは驚きが隠せないくらいに驚いていた。

なのは「なんで、なんでそんなことしたの？」

ヴィータ「だつて、なのはを傷つけたのはアイツだろ?」

なのは「違うよ。私がこいつなったのは全部自分の所為。アリサちゃんがやつたんじやないよ」

ヴィータ「それって、どうこうことだよ?」

なのははアリサと和解したことをヴィータに伝えた。それを聞いたヴィータの顔は驚愕のそれひとつだった。

ヴィータ「そんなの・・・そんなの言つてくれなきゃ分かんないじやんかよ..」

ヴィータはそう吐き捨てる、その大きな瞳の端から少量の涙を流しながら病室から走り去ってしまった。

### 第31話「野望」

『アリサ side』

アリサは木々に囲まれた空間の中に立っていた。

アリサ「動き出したわね。『星黎殿』が」

アラストール「うむ、その様だな」

本来ならば『秘匿の聖室<sup>クコウナカ</sup>』の効果で感知されない『星黎殿』だが、その扱い手であるアリサには『星黎殿』の位置が手に取るように分かる。

アラストール「『天道宮』を使うのか?」

アリサ「うん。『天道宮』で『星黎殿』に近づければ…」

アラストール「そつだつたな。そうすればヤツの野望も食い止められるかもしねん」

アリサ「『天道宮』を出すわ」

アラストール「承知した」

アリサは『夜笠』の懷に手を入れ、そして出した瞬間に何も無かつた空中に『天道宮』が出現する。アリサは『天道宮』内部へ乗り込むと、『天道宮』を自身ごと次元空間へと転送させた。

## 『はやて side』

今は本局の一室で待機状態にある。この部屋にはフュイト、コノノ、アルフ、車椅子に座っているクロノ、ヴィータを除いたヴォルケンリッターが揃っていた。

現在、本局は将来有望の高町なのはが墜ちたということで少なからず混乱に陥っていた。

しかし、リングディ提督らが『シユツシリッター』の幹部を全員逮捕、保護したこともあって警備の方は完全に緩みきっていた。

はやて「結局、アリサちゃんおらへんだなあ

シグナム「それでしたら先ほどヴィータがアリサを見たといついたが」

はやて「それはホンマか!?

シャマル「え、ええ、確かにそう言ひましたよ

はやて「何でそんな大事なことはよ言わんかったん?」

ザフィーラ「実は、アリサを見失つたと・・・」

そんなはやでと、ウォルケンロッターの会話に他の4人も食いかかった。

フュイト「見たんだね？」

シグナム「私は実際には見てはいないが、ヴィータがそう言つていたからな。そんなんだろ？」

アルフ「取り逃がしたって、どうこうことだい？」

その質問に、シャマルは答えてくれた。

シャマル「実は、その、ヴィータけやんがなのはちやんを傷つけたのをアリサちゃんと早とちりしきやつたみたいで……それで……」

クロノ「ギガントハンマーでぶつ飛ばした、ところどころか」

シグナム「全く持つてその通りだ。今回はヴィータの直情的な部分が裏目に出たな」

ユーノ「でも、過ぎてしまつたことは仕方が無いよ」

はやで「せやな。今更ヴィータを責めたつてアリサちゃんが帰つてくゐはすないし」

クロノ「それもそうだな。今はアリサの保護を最優先に考えよう。  
それからユーノー」

ユーノー「なんだい？」

クロノ「『天壌の劫火』<sup>アラストール</sup>のことについてもっと詳しく調べてくれないか？」

ユーノー「お安い御用だよ」

やう言ひとユーノーは無限書庫へと向かった。ユーノーが出て行つたあと、少しの間の静寂。それを破つたのははやてだった。

はやて「どうやら管理局の皆は『シユツツリッター』の幹部を全員逮捕、保護したことで気が緩んだるけど。まだや」

クロノ「そうだ。まだギルバート・D・アークライトの身柄を確保していない」

はやて「次で最終決戦になりそうやな」

『ギル Side』

ギルはジェイルと連絡を取り合っていた。

ギル「そろそろ目的地だ。新たに送られてきたアレ、感謝しているよ」

ジェイル『ハハハ、それは何より。君が管理局を潰してくれると助かるよ。いろいろとね』

ギル「フツ、お前の望みは最高評議会を潰すことだらう?』

ジェイル『本局が墜ちれば最高評議会も死ぬ。君は本局を落すつもりだらう?』

ギル「まあ、そうだがな。それに、イルミナが自分達の部隊員を優先してこちらに転送してくれたからな、兵士の数も十分に足りている」

ジェイル『本局が墜ちるのを楽しみにしてるよ』

ギル「ああ、では通信を切るぞ」

ジェイル『ああ』

ギルは既に見えている時空管理局本局を眺めつつ呟いた。

ギル「やつと、やつとこの時が来たのだ。俺を作り、そして反逆者に仕立て上げた奴等に地獄を見せるときが!」

第31話「野望」（後書き）

誤字、脱字等がありましたら指摘お願いします。

第32話「救援」（前書き）

まさかの連続投稿

### 第32話「救援」

『はやて slide』

ドーンと言づ音と共に、管理局本局が揺れた。

はやて「なんやー? 地震か?」

クロノ「馬鹿を言づな。ここで地震なんて起じるはずないだろ」

突然部屋に響いた震動に慌てふためいていると、勝手に通信回線  
が開く。

ギル『御機嫌よう、管理局の諸君。私はギルバート・D・アークラ  
イト。早速だが、君達には私の作り出す世界の生贊となつてもらう。  
貴様らの犯してきた罪、地獄で償うが良い!』

そして、通信は途絶えた。

すると、突然部屋の入り口のドアが破壊され、デバイスを向けた  
人達が入り込んで来る。

男「動くな! 貴様らのデバイスはこれから渡してもうおう!」

はやて達は抵抗することも出来ず、その指示に従つことしか出来なかつた。

『アリサ side』

アリサ達の目前には既に戦闘が始まっている本局の様子が窺える。

アラストール「遅かつたか」

アリサ「大丈夫。まだ間に合つよ」

アラストール「アリサ、『星黎殿』が……」

アリサ「管理局に突っ込んでるわね。全く、どうして他人の物がそ  
んなに粗末に扱えるのかしら」<sup>ひと</sup>

アラストール「……」

アリサ「行くわよ」

アラストール「心得た」

アリサは『天道宮』の進路を『星黎殿』へと向けた。

『イルミナ si de』

先ほどからずっと外が騒がしい。そう感じたイルミナはその場に留められた全員に問いかける。

イルミナ「さつきから外が騒がしいと思わないか？」

ミーア「や……もうですね」

サーチャ「ここから動くことができればいいのだが」

サーチャはそのまま、血圧を束縛する縄を解く手段を求めて辺りを見回す。すると、静かに寝息を立てているライオットに気が付く。

ライオット「……」

サーチャ「全く、こんな状況で寝るヤツがいるか」

呆れたといった様子で俯きながらサーチャが呟く。と、その時、部屋の扉が爆風と共に吹っ飛び、寝ていたライオットが飛び起きた。

ライオット「な……なんだ！？」

爆発の後、黒煙の中から出てきたのは三人と4機。三人の方は、イルミナ達の部下の人間で、4機の方は橿円を引き伸ばしたかのような形の機械だ。

サーチャ「助けに・・・来ててくれたのか?」

サーチャのそんな疑問に、一人の男が前に歩み出で

男「貴様らはここで始末する」

と、冷徹に吐き捨てた。その言葉に誰もが驚きを隠せない。男に一番先に噛み付いたのは、やはりといつもライオットであった。

ライオット「てめえ、どうこういつたー? てめえらは俺達の部下じやなかつたのかよ! ?」

男はそんなライオットを見下しながら

男「貴様らなどにはもう利用価値が無いとギルバート様も仰つていた。だから始末するのだ」

と、言いつつ、後ろの男一人にも指示を出す。指示を受けた二人はデバイスをこちらに向ける。

イルミナ（ここまでか・・・）

イルミナはただデバイスの先に集まりだす光の玉を見ていことしか出来なかつた。

イルミナ「・・・・・すまん、アリサ」

と、小声で呟く。そして、男一人のデバイスの先から光が放たれた。

『はやて side』

今、この部屋では、はやて達を取り囲むように男達がデバイスをこちらに向けて立つてゐる。その内の一人がどこかと連絡を取つているようだ。

男「確認が取れた。ここに居るのはハ神はやてとそのヴォルケンリツター3名、フェイト・テスタークサ、クロノ・ハラオウン、リンディ・ハラオウン、エイミィ・リミエッタの以上8名だ。その内、ハ神はやてとフェイト・テスタークサを『星黎殿』に連れて行く。

それ以外は始末しろ。手が空いている者は高町なのはと用村すずかを探せ！」

「 「 「了解」」

男達は的確に、はやてとフェイトを拘束し残りの6人にデバイスを向ける。

はやて「やめて！」

男「ハツ、五月蠅いガキだ。やれ」

シグナムたちに向けられたデバイスに、その一撃でも当たれば致命傷となる光が集まっていく。そしてそれが放たれようとした刹那、赤い炎が男達を包み込み男達の意識を確実に刈り取っていく。

はやて「何やー？」

炎が放たれた後を追うとそこには炎の翼を生やしたアリサが居た。

フェイト「アリサ、助けに来てくれたの？」

フェイトの質問に、アリサは頷く。はやてとフェイトに近づいた

アリサは、一人を縛る縄を『贊殿遮那』で切り落とす。

アリサ「アレンは何処?」

その質問に答えたのはリンクティ。

リンクティ「地図よ。ここがイルミナさん達が拘束されている場所」

リンクティは管理局内の地図をアリサに渡す。

アリサ「ありがとうございます」

そう言い残すとアリサは走り出していった。  
はやは男が持っていた自分達の『バイクス』を

はやて「私達もいひしちゃいられない。シグナム」

シグナム「はい!」

はやて「ザフイー(はま)」でシャマルと一緒にクロノくんとコンバ  
イ提督の警護や」

ザフイ「承知した」

シャマル「ええ、分かつたわ

はやて「行くで、シグナム、フュイトちゅん

シグナム「はいっ！」

フュイト「うん」

はやてとシグナム、フュイトはバリアジャケットを展開し、部屋から飛び去った。

『イルミナ シュード』

男達のデバイスから放たれた弾は、炎の壁によつて遮られた。

男「な、なんだ！？」

イルミナ達はこの炎に見覚えがある。この炎は間違いなくアリサのもの。

アリサ「助けに来たわよ、アレン」

### 第32話「救援」（後書き）

誤字、脱字等がありましたら指摘お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6998p/>

魔法少女リリカルなのは～FlameS～

2011年9月28日21時22分発行